

腰飾り・抜歯と氏族・双分組織

Clan System and Dual Organization of the Final Jomon Period
in Mikawa Region, Central Japan

春成秀爾

HARUNARI Hideji

①序 説

②腰飾りと抜歯系列

③叉状研歯と抜歯系列

④再葬と抜歯系列

⑤吉胡貝塚の墓地構成

⑥縄文晩期東三河の社会構成

【論文要旨】

縄文後期末～弥生前期の三河地方には、4I系と2C系に区別して施した抜歯、一部の男性がつける腰飾り、一部の男女に施した叉状研歯、複数個体の人骨を集積した再葬墓など特色のある習俗が広がっていた。渥美半島～豊川流域の東三河を代表する吉胡貝塚と伊川津貝塚の墓地で埋葬してある人のうち、L型式の腰飾りをつけた人の抜歯は4I系、Y型式の腰飾りとV型式の腰飾りをつけた人の抜歯は2C系に多い。両貝塚で叉状研歯を施した人の抜歯はすべて4I系である。保美貝塚に多いJ型式の腰飾りと抜歯系列との関係は明らかでない。合葬は4I系同士、2C系同士はあるが、4I系と2C系との間には存在しない。吉胡、伊川津、保美貝塚では再葬は2C系の人に顕著であり、合葬した2C系の人同士で血縁関係が考えられる例もある。

これらの現象を総合して、4I系はL氏族（仮称）を含むグループ、2C系はY氏族とV氏族（仮称）を含むグループ、L、Y、V、J型式の腰飾りはそれぞれの氏族の長が身につける標章であって、4I系グループと2C系グループとの間には上下の格差があり、腰飾りをつけた人が多いL氏族は、吉胡集団さらには東三河の諸氏族のなかで最上位を占めていたと推定する。すなわち、東三河は二つのグループ、四つ以上の氏族によって構成される社会であり、吉胡集団、なかでもL氏族は東三河で部族的結合の中心的な役割をはたしていたと考える。4I系グループと2C系グループの数はほぼ1対1である。しかし、それぞれのグループ内の男女の割合は、吉胡貝塚と伊川津貝塚ではほぼ1対1であるのに対して、保美貝塚では4I系では女が多く、2C系では男が多い。これを二つのグループへの帰属になんらかの規制が加わった結果とみるならば、それぞれを半族とみて東三河に双分組織の存在を想定することが可能である。

【キーワード】腰飾り、叉状研歯、氏族、縄文晩期、双分組織、抜歯系列、吉胡貝塚

①……………序 説

(1) 抜歯の二系列の解釈

縄文晩期の西日本には4I系と2C系の二つの抜歯系列が存在する。筆者はこの事実に気づき、4I系と2C系の人たちはそれぞれ一つの氏族を構成していたと考える論説「抜歯の意義」を1973年に発表した〔春成1973〕。その後、1979年に4I系の人はその土地の出身者で2C系の人とは他集団からの婚入者と解釈し直し、縄文晩期の婚後居住様式について東海西部～近畿地方は選択居住婚、中国～九州地方は妻方居住婚優勢とする考えを展開した〔春成1979〕。そして、2002年にそれまでつづけてきた縄文時代の親族組織に関する研究を『縄文社会論究』の一書にまとめた〔春成2002〕。

筆者がこのような研究を思いついたのは1972年のことで、前年に大林太良（民族学）は考古学研究者が提出した資料や意見を民族学の立場から検証し、縄文時代の社会組織について次のような仮説を提出していた〔大林1971：70～71〕。

1. 政治組織の発達は未熟で、一定の領域をもつ集落が基本的な政治単位である。世襲的酋長存在の可能性はあるが、大きな権力をもっていたとは考えられない。サケ漁撈に主に依存していた地域では、貧富の差はありえても、酋長制の発達は、これよりさらに未熟だったろう。
2. おそらく何らかの形における夫方居住制が支配的で、女子の植物採集の比重が高いところでは妻方－夫方居住制の可能性もある。しかし永久的な妻方居住制が存在した可能性はほとんどない。
3. 出自に関しても、従来主張された縄文時代における母系制の存在ははなはだ疑問である。むしろ父系制か双系制をとっていたと思われ、ことに中期の関東内陸部から中部高地にかけては、外婚父系氏族が存在した可能性が高い。
4. 縄文時代の主な家族形態は核家族型であったろう。
5. 双分組織が存在した痕跡が東日本の中期、後期にあるが、これら痕跡のすべてが果たしてそう見てよいかは、まだ検討の余地がある。中期の長野県与助尾根の場合は、父系外婚的の双分組織が存在した蓋然性があるが、その他の場合、双分組織が外婚的であったか否かはまだ不明である。

大林の試みは、民族例を考古資料に適用して解釈することにきわめて慎重または拒否の姿勢を貫いてきた考古学研究者にただちに受け入れられるところにはならなかったけれども、次世代の研究者に対して一定の刺激と展望を与えることになった。

大林の論文発表に先立つ1969年に、金関恕（考古学）は、山口県土井ヶ浜遺跡の弥生墓地を分析し、男と幼児の埋葬が多い密集地区を「家の墓地」つまり土井ヶ浜出身者の墓地で、女性が多い周辺地区を他家から来た人の墓地とみて、「男性優位のおそらくは父系・父権傾向をもっている社会」ととらえる一文を書いていた〔金関1969：204〕。金関の発想の源は、千葉県市原郡^{うるつ}湿津村勝間^{うるつ}で「ごく近年まで、男女を別の墓地に埋める風習があった」こと、同県長生郡日吉村^{はりがや}針ヶ谷^{うるつ}で「家の墓地には、その家で生まれた者のみを葬り、他家から来た者は別に埋葬するという習俗」⁽¹⁾があったことを最上孝敬（民俗学）の報告〔最上1953：85～87〕で知り、「家の墓地には、男と幼児の埋

葬が多くなる」と考えたことであった。依拠した最上の名も文献名も示さず論文の体裁をとっていない短文であったけれども、縄文・弥生時代の墓地を考古学的に分析して社会組織の問題に踏み込んだ試みとして、甲元眞之や筆者に影響を与えた〔甲元 1975, 春成 1982〕。

1984年1月に国立民族学博物館で開催された「日本民族文化の源流の比較研究」の第5回シンポジウム「社会組織—イエ・ムラ・ウジー」(実行委員会委員長・竹村卓二, 同副委員長・小山修三)では、民族学, 社会学, 歴史学, 考古学の諸分野の研究者30余名が一堂に会し, 18本の報告と討論を4日間にわたってつづけた。考古学分野では都出比呂志, 甲元眞之とともに参加の要請があった筆者には「採取社会から農耕社会へ—日本」の課題が与えられた。そこで, 筆者は抜歯の二系列の分析にもとづく婚姻居住規定の時期的地域の変化について, 縄文時代から弥生時代への転換の問題とかかわらせて報告した。そのときに抜歯の4I系は身内, 2C系は婚入者を示しており, 外婚の単位は基本的に一居住集団であるとする1979年以來の考えを述べた〔春成 1984, 1986〕。筆者がそのように解釈したのは, 調査のフィールドとしていた北部九州, 中国, 近畿地方では, 縄文時代の集落は小規模であり, それはおおよそ10km間隔で分布する自立分散型であると認識し, 集落=居住集団の完結性を重視していたことが大きな理由になっていた。

それに対して, 討論に参加した松園万亀雄(民族学)は, 外婚の単位を集落ではなく複数の集落を含めた「地域」であるとみても不都合はないのではないか, 外婚という時には, 最大の枠がどこにあるかが, 集団の性格を知るためにはもっとも大事なことではないか, との意見を述べた〔竹村編(松園) 1986: 434〕。

筆者も, 複数の集落から夫または妻を迎えると理解していたから, 厳密にいうと集落を出自集団と考えていたわけではなかった。しかし, 出自集団あるいは氏族の存在を考古資料のなかに見出すことができなかったために, 集落または居住集団が出自集団であるかのような議論になっていたことは否定できない。1982年に発表した論考「縄文社会論」のなかで, 「居住集団が一定の自立性をもちつつ, その上位の組織体はすぐ部族となっているような, いうなれば氏族なきルーズな部族社会の外貌を縄文社会はその一つの特徴としているように見える」と表現したのは, 考古学的に証明できていない出自集団としての氏族の存在を先験的に設定したくないという立場であった〔春成 1982: 250〕。ちなみに, 同シンポジウムで日本周辺地域の新石器時代の社会組織について発表した甲元眞之は, 江蘇省劉林遺跡, 大墩子遺跡, 山東省呈子遺跡などの墓地を分析し, 男女からなる群, 男からなる群, 女からなる群の3つの群を識別し, 「そのムラの出身集団, 結婚を媒介としてこのムラに来た人たち」で, 後者はさらに「このムラからみて男性をもらうムラ, 女性をもらうムラ」の存在を想定し, 3つのムラの相互友好関係で社会が形成されていた」と結論づけている〔甲元 1986: 418~421〕。甲元は1975年に, 山口県土井ヶ浜遺跡と中ノ浜遺跡などの墓地の埋葬を群別し, 出身集団のちがいにおきかえるという金関の墓地分析の方法を踏襲していた〔甲元 1975〕。その手法を中国の初期農耕社会の分析にも適用したのであった。

シンポジウム当日は筆者の報告に対する発言はなかったが, 佐々木高明(民族学)は, のちに自著で次のように述べた〔佐々木 1991: 180~181〕。

「ムラをつねに外婚の単位と考え, ムラと出自集団をオーバーラップさせて考える春成氏の考え方には, 文化人類学の立場から, すぐには賛成できない。ムラと出自集団がかつては一致していた

という事実については少なくとも日本の社会の中に伝承されてきたさまざまな慣習や習俗の中に、その痕跡がまったく認められないからである。したがって、同氏の結論—縄文時代晩期に東日本では夫方居住婚が、中部・近畿地方では選択居住婚が、中国・四国地方では妻方居住婚が卓越し、縄文時代全体としては、妻方居住婚（母系制）から選択居住婚（双系制）をへて夫方居住婚（父系制）へと変遷したという—も全面的にはうけいれるわけにはいかない。そして、佐々木は「最近の社会人類学」の分野での指摘をうけて、筆者の説にかわる考えとして、「西日本には双系的な社会、東日本では父系にやや偏ったアンビ系の社会がひろがっていたのではないだろうか」と提案した⁽²⁾。

その後、小林達雄（考古学）は、縄文時代の集落、住居、墓地に「二派の集団」が共存していることから、北アメリカ北西海岸先住民の社会を参考にして、抜歯の二系列もまた、「双分制」と密接なかかわりをもつのではないかと提言した〔小林1993：139～142〕。

(2) 考古学的な解釈の問題点

筆者は、腰飾りなど装身具の着装者や又状研歯を施した人物が4I系の人に偏っていること、愛知県渥美郡田原町（現、田原市）吉胡貝塚の墓地で埋葬小群の中心を4I系が占め、2C系はその周辺に配してあるようにみえることから、抜歯の二系列によって識別しうる二つのグループの間には優劣の関係があると考えていたので、その後も、抜歯の二系列は集落の内と外という区分原理に基づいているとする見方を変えなかった。そして、20体前後の男女の遺体の埋葬からなる埋葬小群は、4I系と2C系の両者を合わせ成り立っていることから、世帯に対応するものと考えていた。しかし、のちにも国立民族学博物館長を務めた2人の民族学（文化人類学）研究者の反対意見は、親族組織の民族例に疎い筆者には忘れがたく、この問題はその後、脳裏から離れることはなかった。

筆者は1995年につきのように述べた〔春成1995：86〕。「抜歯の二系列のあり方は一見、双分制の反映であるようにみえる。しかし、双分制では、二つの半族は基本的に対等な関係をもっているのに対して、抜歯の4I系の人たちと2C系の人たちとの間には優劣の関係がある。また、抜歯・装身具に出自集団なり氏族なりのシンボルという意味があるとすれば、それらはもっと変化に富んでいてもよいはずだが、そのようには見えない、などの理由から、抜歯の二系列は婚姻時に血縁関係の有無を表示するような構造をもっていると理解したのである。この理解が誤っているとすれば、思考過程のどこかに誤りがあるにちがいない。」

私見に対する形質人類学や自然科学の方法を用いての検討や批判は、1990年代の終わり頃から続出した〔田中・土肥1988、橋本・馬場1998・2000、毛利・奥1998、松村2000、Kusaka *et al.* 2008、2009、山田2008a、設楽2009〕。

近年では、縄文時代の「抜歯の契機は成人儀礼」であって、筆者がいうような成人抜歯→婚姻抜歯という過程は存在しない⁽³⁾、抜歯系列のちがいは出自集団／半族の表示であって、集落の在来者と婚入者の区別ではない、とする田中良之や舟橋京子の批判と主張が著しい〔田中1998、2004、2008、舟橋2003、2009、2010〕。

田中は最新の著書で次のように述べている〔田中2008：23～26、46、59～61〕。筆者の1973年の論文で用いている「氏族」の用語には誤解がある。「墓地を墓域や頭位、抜歯型式などを根拠にして二群を設定し、一方をそのムラの出身者の群、他方を結婚によってそのムラに入ってきた人々の

群と仮定したうえで在来者と推定して群の性構成から親族構造を論じる」という金関恕以来の考古学研究者による「ムラ出自論」は誤りである。すなわち、「未開社会における「出自」は氏族や半族などに基づくものであり、出自の母体となることはあり得ない」。「ムラ出自説は未検証というより、もはや棄却された仮説であり、この方法自体は無効といわざるを得ない」と断じ、1979年以來の筆者の抜歯系列の分析にもとづく婚後居住様式の研究を否定している。そして、歯冠計測値や頭蓋骨小変異の分析によると、愛知県伊川津貝塚の2C系抜歯を施した人たちのなかに血縁者を含んでいたこと、岡山県津雲貝塚で男女とも血縁者を含み、また4I系抜歯の人たちと2C系抜歯の人たちはそれぞれ血縁者を含む一方、二つの抜歯系列間では有意差がなかったことから、抜歯の二系列は、部族を二分する半族を表示していたのではないかと考える。そのうえで、近縁の部族が並立することにより、広域で半族の原理が共有されるとして、各氏族を半族の中に位置づけ、部族—半族—氏族の社会構成を理念的に想定するのが田中の説である。

舟橋は、抜歯したあとと死亡した人物の最年少個体を調べ、抜歯の年齢は10-12歳までさかのぼること、15歳でいどで4I型の抜歯が存在することから、抜歯の順番は筆者の考えるような上顎左右犬歯の抜歯=成人抜歯→下顎全切歯の抜歯=婚姻抜歯ではなく、むしろ同時であると主張し、4I系・2C系抜歯を婚姻儀礼と結びつける私見を否定し、「成人儀礼に伴う集団成員の大半に課せられた集団成員権獲得のための抜歯」とする。そして、田中と同様に、出自表示説を展開し、縄文晩期の東日本の抜歯は半族を表示、西日本は「社会的文化的な性であるジェンダーを区分軸とする何らかの社会的・宗教的・政治的集団のような非親族ソダリティーと対応している可能性が高い」という〔舟橋2010:330~331〕。

抜歯の年齢について、舟橋がたとえば10-12歳と査定した吉胡44号人骨（上顎の左犬歯を欠如、右犬歯は不明、下顎の左犬歯・第1小臼歯を欠如、右犬歯は不明）、15歳でいどとした吉胡111号人骨（上顎の左犬歯を欠如、右犬歯は不明、下顎の全切歯を欠如、4I型か）、14歳とした稲荷山2203号人骨（下顎の右犬歯のみ欠如）を、山田康弘はそれぞれ思春期（13-16歳）、壮年前期（18-23歳）、思春期（13-16歳）としている〔山田2008c:118〕。一部の人骨の抜歯年齢を、どこまで細かくしほりこむことができるのか、できたとしても稲荷山2203号のような下顎の右犬歯のみの抜歯(?)をどこまで普遍化してよいのか、問題をのこしている。また、舟橋の結論は、東日本と西日本の境界線を伊川津貝塚と保美貝塚の間にひいているけれども、両貝塚は渥美半島の西端に位置し、その間の距離は7km、同一土器、同一抜歯系列、同一文化をもつ隣り合わせの集落であって、その結論を理解するのは難しい。さらに、4I系と2C系のそれぞれの男女比に明らかに偏りが存在するという重要な点について、「ジェンダー」や「非親族ソダリティー」のような概括的な表現では説明したことにならない。田中や舟橋の主張には、参考にすべきところが多いけれども、この課題を発展させるには、考古資料の分析にもとづいて氏族の存在の証明などに取りくむことが必要である。

筆者が1979年に論文「縄文晩期の婚後居住規定」をまとめるさいに、分析の必要性を感じながら、これまで放置していた課題がいくつかあった。それは、吉胡貝塚の墓地内にいくつもの埋葬小群が存在し、叉状研歯や腰飾りをもつ人骨の数は小群によって多寡があり、腰飾りにはいくつかの型式が存在することであった。また、腰飾りは4I系の抜歯人骨に伴うことが多いけれども、2C系の抜歯人骨にも少数ではあるが伴っていることであった。

さらに、筆者も参加した1984年の愛知県渥美郡渥美町（現、田原市）伊川津貝塚の発掘調査で多数の埋葬人骨が見つかったときに、田中良之・土肥直美に歯冠計測値と頭蓋骨小変異の分析を依頼したところ、伊川津8406号墓の再葬人骨13体のうち2C型抜歯の8体の間に血縁関係が存在するとの報告をうけた〔田中・土肥1988〕。4I型抜歯について同じような作業をおこなっていなかったため、この問題についての追究は保留せざるをえなかったが、これは重大な分析結果であった。

問題を前進させるためにいまできることは、まだ手つかずの状態にある諸資料を分析する作業である。今回は、この問題を扱ううえでもっとも豊富で充実した内容をもつ吉胡貝塚〔清野1949, 1969, 清野・金高1929, 斎藤編1952, 増山・坂野編2007〕と伊川津貝塚〔伊川津貝塚編集委員会編1972, 小野田・春成・西本編1988〕の発掘資料の分析を中心にすえ、これまでの私見を再検討する。そして、東三河の縄文後・晩期の社会組織についての一つの試論を提示することにしたい。

②……………腰飾りと抜歯系列

(1) 腰飾りの型式と年代

腰飾りは、通常、成人男性の一部が腰に1点を着ける長さ4～10cm大の鹿角製装身具である〔春成1985, 2002〕。吉胡貝塚では、男性23例、女性2例、性不明2例の着装例と幼児に伴出の2例のうち、男性19例と女性1例の計20例は鹿角製品、のこりの男性1例、女性1例、幼児1例は骨製品または猪牙製品である。伊川津貝塚では、男性4例、着装例はすべて鹿角製品で、貝層出土の1例に猪牙製品がある。

鹿角製腰飾りにはL字形、Y字形、V字形、J字形などを呈するいくつもの独立した型式が同時に併存し（図1）、それぞれ時間的な変化を示す諸型式に分けることができる。

最初に、東海地方西部の腰飾りの型式と、それぞれの変化をみていきたい（図3）。

L型式

春成1985ではV形腰飾りa類とした。代表的な例はLの字を90度回転した形で、大きな頭部に紐通し用の孔をあけ、それと直交するように下端に穿孔して環状部を設けている。環状部におそらく先端を尖らせた木製の棒を通して短剣状の器具を作り、それを腰にさげて「飾り」にしたのであろう。L型式の腰飾りを次の三型式に細分する。

L1式 吉胡85号、106号人骨と伊川津5910号人骨⁽⁴⁾に伴った例。胴部に角状の長い突起をもち、頭部の頂にも上向きの突起をもつ複雑な形状を呈する。2孔をもつ吉胡106号例は、一部が欠損してその痕跡を鉤状にのこしている大きな孔が当初の孔であって、完存している小さな孔は欠損したあとに新たにあげたもので左右2個所に切り込みをいれている。下端の環状部の形態にも変化があり、吉胡85号、106号例は革紐で棒に緊縛した状態をかたどったと見うる隆起帯をめぐらせている。吉胡106号例は、環状部の下端が下方に延びており、頭部・環状部ともに古い特徴をもっとも多くそなえていると理解し、L型式のなかの最古型式に位置づける。

伊川津5910号人骨に伴った例は、出土時の写真（実物は行方不明）から判断すると、上半部は吉

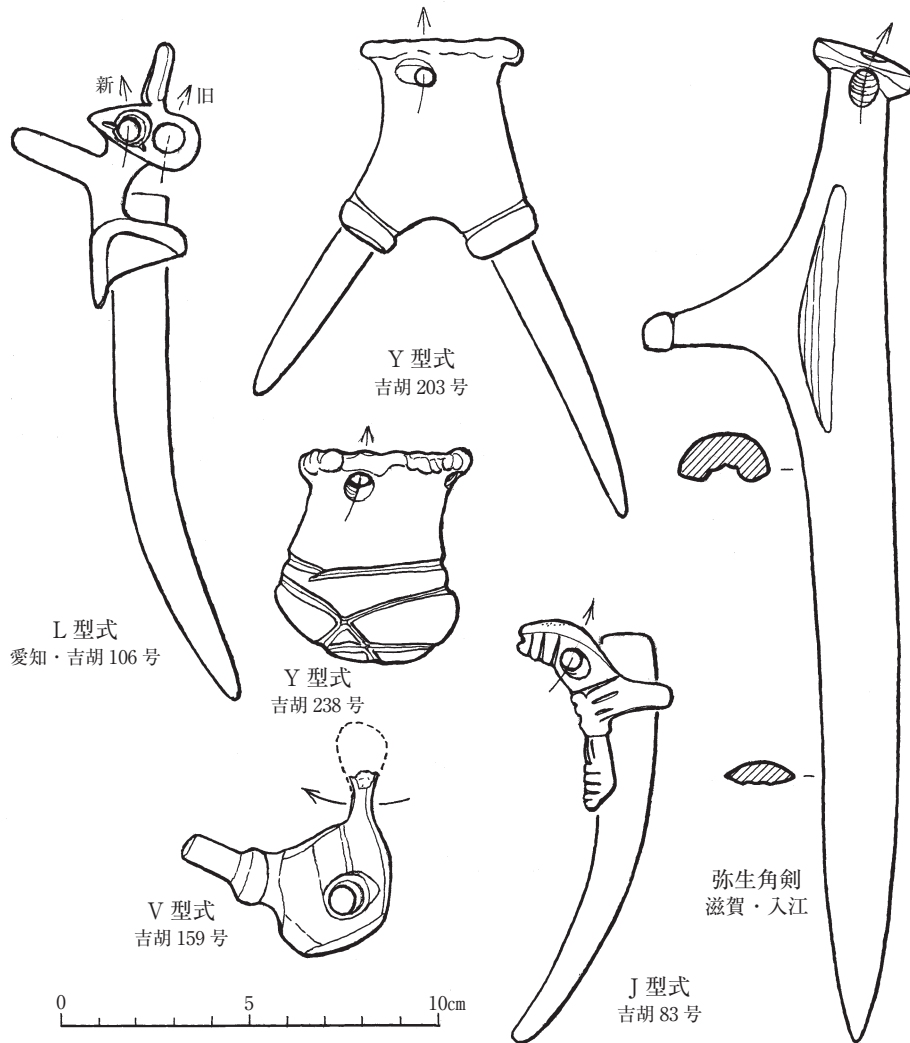


図1 腰飾りの諸型式

棒状物の装着は推定。Y型式は棒を装着するものと、しないものがある。このV型式は磨耗が進んでいる。

胡 106 号と酷似しているため、L1 式に分類しておく。保美貝塚の貝層中から出土した 09G2j 腰飾りは、胴部に角状に横方向の突起をもち、頭部頂に上向きの突起をもっている。しかし、吉胡例と比較すると、鈍重な作りである。おそらく模倣の過程で省略と変形が加わったのであろう。

東海地方の例ではないが、岡山県倉敷市中津 6611 号人骨に伴った腰飾り⁽⁵⁾は頭部に大きな紐通し用の孔と斜め上方を向いた長い突起をもち、角坐をえぐりこんで摺鉢状に凹めた基部をもっている。縦に幅広い角状突起と基部の間に楕円形の隆帯を斜め横向きに 1 周に 2 単位を配している。大きな孔をもつ環状部の上方向と横方向に短い突起をつけている。二つの小突起は吉胡 106 号例を祖型にしていると考え、L1 式の変異として扱っておく。

L2 式 吉胡 104 号、123 号、232 号、249 号、293 号人骨に伴った例。頭部の突起はなく、胴部の突起は短くなっているが、まだ存在する。孔の両側に短線を痕跡的に刻んでいる。

L3 式 吉胡 92 号、115 号、120 号、145 号、5125 号、0402 号⁽⁶⁾、伊川津 2210 号、稲荷山 2234 号人骨に伴った例。胴部の突起は完全になくなり直角の単なる角になっており、単純な形態である。孔の両側の短線はない。吉胡 5125 号例の環状部の下部にある隆起帯は L1 式の吉胡 85 号例の隆起

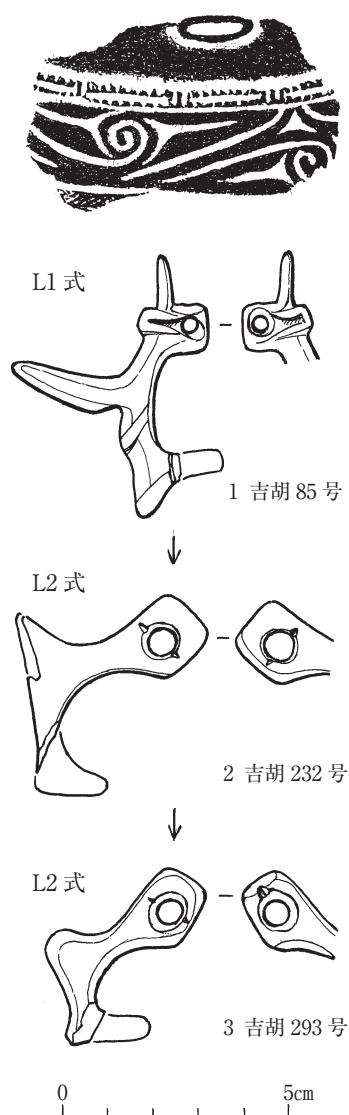


図2 吉胡貝塚出土の土器の玉抱き三叉文と腰飾りの文様

土器は縄文晩期初めの安行Ⅲa式で関東地方からの搬入品。腰飾りの孔は「玉」に、両側の短い線刻は三叉文に由来すると考える。

帯の名残りであろう。

以上、L型式では①胴部の角状の突起がしだいに短く痕跡的になり、単なる屈折部になっていく、②孔の左右の切り込みが痕跡化し消滅していくとみて、L1式からL2式を経てL3式に変遷したと考える。

L型式は、吉胡貝塚から13例出土しており、もっとも多い。同貝塚の第2トレンチの混土貝層から長い角状の突起をもつL2式の未成品が1点出土している(図4-1)。L型式を吉胡で製作していた証拠である。山内清男は包含層の時期を「恐らく晩期中」頃としている[山内1952:107]。吉胡106号・同85号人骨に伴った腰飾りの孔の両端または一端に彫り込んだ横長の三角文は紐通しの孔と合わせると、吉胡貝塚からかつて出土した土器(天理大学附属参考館蔵)[杉山1927:第148図版]に施されているような玉抱き三叉文に由来する可能性が大きい(図2)。この文様は北陸地方の勝木原式・御経塚式前半、関東地方の安行3a式・3b式などの土器にみられるので、L型式の上限は縄文晩期初めに求めることができるだろう。L型式は、他には伊川津貝塚から2例(L1式、L2式)、遠く離れた岡山県笠岡市津雲貝塚から4例(L2式1点、L3式3点)出土している。知多市大草南貝塚例は、線刻文様をもち装飾性が豊かであって、別型式の変異とみるべきかもしれない。

抜歯型式は、吉胡貝塚では4I型が10例、2C型が1例、無抜歯が1例、不明が1例である。伊川津5910号は4I型、同2210号は不明である。津雲(清野)1903号は4I型、同(長谷部)1908号は2C型、同(同)1917号は1I型、松枝号数不明は4I型である。中津6611号は上顎左右犬歯だけを抜いた0型であった。

Y型式

春成1985ではV形腰飾りb類とc類とした。縄文後期の関東・東北地方に存在するY形短剣の頭部が腰飾りに変化したようにみえる。代表的な例は鹿角の角坐から角幹と第1枝が分岐する部位

までを利用し、海綿体を完全に除去して漏斗状にして角坐付近に紐通しの小さな孔を2個所にあけた型式であって、先端の穴に木製品または角製の小棒をさして垂下したか、またはこれだけを逆Y字形になるように垂下したようである。Y型式を次の二型式に細分する。

Y1式 吉胡103, 203, 238, 251号, 0504号, 伊川津8401号, 刈谷市本刈谷0305号人骨および名古屋市玉ノ井遺跡のSK40土坑墓に伴った例。角坐の端にあけてある小さな孔はよく磨滅している。装飾性は少ない。孔に紐を通して垂下すると逆Y字形になる。吉胡238号例には上下を区切ったX字形の線刻がある。吉胡103号や203号例は海綿体の部分を完全にくりぬいて孔にして

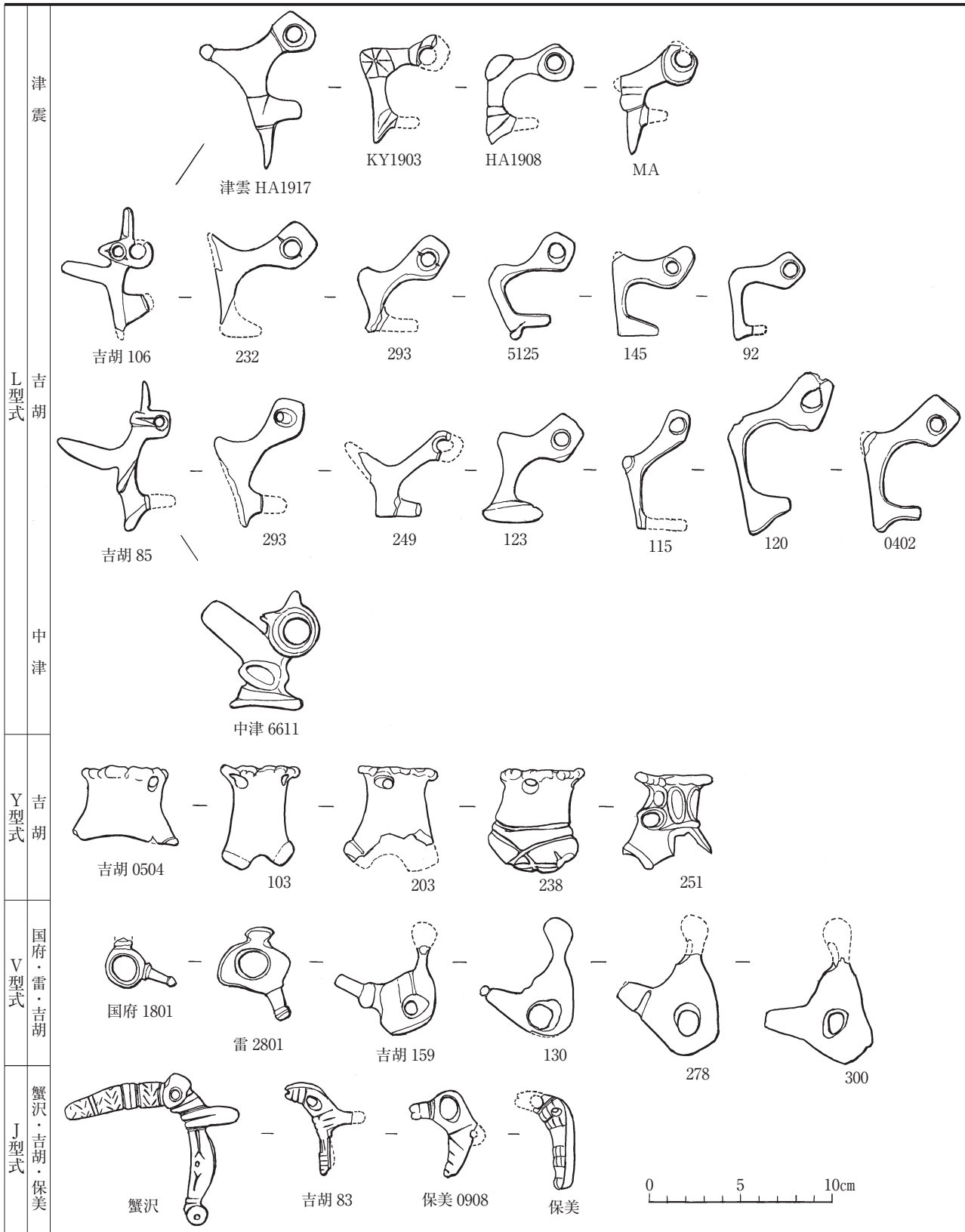


図3 腰飾りの変遷 吉胡貝塚のL型式に2系列が存在するという意味ではない。

いるので、Y字形の両分岐位置に小棒を挿入することが可能である。しかし、吉胡0504号や伊川津8401号例は先端が閉じているので、これだけで完結した装身具として使用したようである。

Y2式 吉胡251号人骨に伴った例。紐通しの孔を中ほどにもつ。凹線で囲んだ楕円形の高まりを縦に7単位並べて1周させている。この例はY字の片方が欠損したあと再加工している。本来、ここはほぞ穴になっており、小棒を挿入して使っていたようである。再加工後に全面にわたって真っ赤に丹塗りしている。

Y型式は、紐通しの孔の位置から判断してY1式では逆Y字形に垂下し、Y2式で横Y字形に変わったと考える。

Y1式の腰飾りを伴った吉胡0504号人骨は貝層下の細礫層に墓坑を掘って屈葬し、晩期初めの貝層がおおっていたというから、Y1式の年代は古い。吉胡238号のY1式に線刻してある七宝繫文は近畿地方の滋賀里Ⅱ式～Ⅲa式土器を飾る文様であるから、晩期初め～前葉に位置づけることができよう。Y1式の伊川津8401号も、墓穴を貝層下の細礫層のなかにもっており、晩期初めの可能性が大きい。本刈谷0305号は晩期中頃、玉ノ井SK40の年代は晩期前葉の元刈谷式(大洞B-C式併行)以降とされている。しかし、Y1式の吉胡203号は伸葬であるので、晩期後半までくぐる可能性がある。

伊川津貝塚からは他に1984年のA3区Ⅲ層(晩期中葉の稲荷山式の時期)からこの型式の小破片が出土している[小野田ほか編1988:201(157)]。使用中に欠損し、大きな破片のほうに新たに穿孔して使いつづけたのであろう。

Y2式の吉胡251号例は、文様の起源を東北地方中部の大洞C2/A1式後半の沈線連子文[設楽・小林2007:83～90]に求めるならば、晩期後半の初めまでくぐることになる⁽⁹⁾。

吉胡貝塚から出土した5例の抜歯型式は、2C型が1例、2C2I型が1例、無抜歯?(下顎の中切歯1本が欠除)が1例、不明が2例である。3体の男性骨からなる盤状集積骨に伴って出土した伊川津8401号例は、抜歯型式がわかる2体は2C型であるので、2C型に伴ったと推定する。本刈谷0305号も2C型であった。例は少ないが、Y型式は2C系とのつながりがつよいとみてよいだろう。

玉ノ井SK40は、人骨は遺存していなかったけれども、2C系の埋葬小群[山田2008b:121]のなかに位置しているので、2C型の可能性がある。

伊川津貝塚から出土した未完成品の1点(図4-2)[川添2007:20, 図15-51]は、おそらくY2式の失敗品であって、同貝塚でY型式の腰飾りを製作していた証拠となる。

V型式

春成1985ではV形腰飾りd類とした。代表的な例はV字形で、鹿角の分岐する部位を利用し、角幹側に大きな孔をあけ、さらに角枝側にその孔と直交方向に小さな孔をあけている。後者に紐を通して腰に着けたらしく、6例のうち4例までこの個所で破損している。大きな孔には紐飾りをつけていたのであろう。V型式を次の三型式に細分し、うち二型式をさらに二細分する。

V1a式 大阪府藤井寺市国府1801号人骨に伴った例。鹿角を半截して得た板を素材にして幅の狭い環の外側2個所に突起をもつ小型品。突起の一つは基部に突帯、先端に龟头状の膨らみをつけている。もう一つの突起はやや大きい、先が欠けているために細部は不明である。

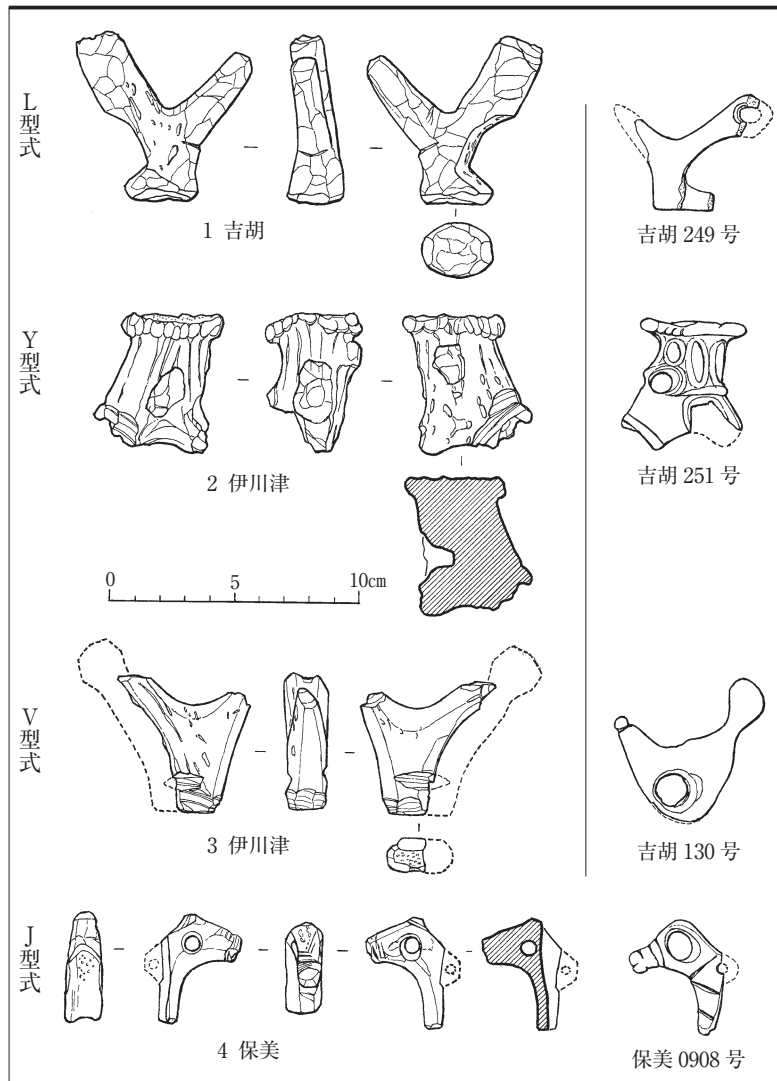


図4 腰飾りの未完成品[川添2011]と人骨に伴った製品

未完成品を出土した貝塚遺跡は、そこで製作されたことを証明する。

V1b式 愛知県名古屋市雷 2801号人骨に伴った例。やはり鹿角の片面だけで作っており、環の幅は広くなり、突起の一つには中央の孔と直交方向に紐通し用の孔をあけた小型品である。

V2式 吉胡 159号人骨に伴った例。鹿角の分岐部の両面を素材にして全体形がV字形になり、環状であったものが、台形にやや大きな孔をあけた形になる。突起の基部にふくらみをつけている。

V3a式 吉胡 130号人骨に伴った例。全体形が鉤形のV字形になる。突起の先端に溝をめぐるせて小さなふくらみを設けている。

V3b式 吉胡 278号, 300号人骨に伴った例。全体形がV字形で、突起は単純化する。突起の先端に浅い溝をいれるものと、それを省略したものがある。

V型式の腰飾りは、大きな飾り孔をもつ環に小さな角状の突起をつけたV1式から、孔をあけるだけで環にまで加工しないV2式を経て、突起の形が簡略化したV3式に変遷したと考える。V1式

の形態は吉胡94号、143号人骨に伴ったW型式と通じるところがある。

吉胡130号、159号、278号、300号のいずれも、紐通しの孔の周辺は著しく磨滅している。130号の飾り孔の位置が縁辺に片寄っているように見えるのは、磨滅の結果であろう。

伊川津貝塚から出土した未成品の1点(図4-3)[川添2007:20, 図15-52]は、穿孔中に欠損したV2式またはV3式であって、同貝塚でV型式を製作していた証拠である。

吉胡159号と同130号は軽い屈葬であるので、V2式とV3式は晩期中頃ないし後半までくだるかもしれない。

吉胡貝塚の4例の抜歯型式は、159号が2C2I型、278号が4I2C型、130号は不明、300号は近くから出土した301号の抜歯型式からすると2C系の可能性がある。雷2801号も2C型であって、V型式も2C系とのつながりがつよいようである。

J型式

春成1985では鳥形腰飾りとした。J字形(あるいはト字形)を呈する。頭部に紐通し用の大きな孔を穿ち、中央に環状部をつけているので、L型式と同様に棒をさして短剣状の飾りにして使ったのであろう。J型式を次の三型式に細分する。

J1式 山形県蟹沢、岩手県瀬沢、宮城県里浜、山王遺跡など東北地方の遺跡から見つかった例。棒状の突起が長く伸びている。環状部をもっており、L型式と同じように木製の棒を挿入して短剣状に佩用したのであろう。蟹沢例には、玉抱き三叉文と無軸羽状文を施している。

J2式 吉胡83号人骨に伴った例。環状部をもち、棒状突起が著しく萎縮しているが、まだ存在する。胴部に並行沈線を施している。棒状突起の先端には十字形の線刻がある。

J3式 保美0908号人骨に伴った例[高木・坂口編2010:図版8-46]、保美貝塚の出土状況不明の2点。保美0908号例は、環状部をU字形に変えて簡略化し、そこにあけた小さな孔を目釘孔にして棒状品に装着したのであろう。棒状突起は完全になくなっている。先端には十字形を刻んでいる。保美貝塚の出土状況不明の2点[川添2011:図5-62・63]は、胴部に細かな格子文を彫刻した小型品である。

伊川津2206号例[小金井1923:第6図版](実物は行方不明)。環状部をもたず大きな孔とその横に小さな孔をあけている。前者は紐孔、後者は棒状品に装着するための目釘孔であるが、最初の孔が欠損したあとにあげ直したのであろう。棒状突起はほとんどない。J3式と推定する。

J1式の蟹沢例の文様は東北地方では大洞B式にみられるので、東海地方のJ2式も縄文晩期初め頃とみてよいだろう。J3式の保美0908号例は、五貫森式の時期の貝層を切り伸葬であったので、J3式は縄文晩期末までくだる。保美貝塚では他にJ3式の未成品1点(図4-4)[川添2011b:115-19]が出土しているので、同貝塚でJ型式を製作していたことは確かである。

春成1985でC型腰飾りc類とした吉胡128号人骨に伴った腰飾りは、基部に2孔をあけ、細長い棒状部をもったし字形をしている。これはJ3式の腰飾りに棒を装着した状態を一体化して作ったものであろう。

抜歯型式は、吉胡83号は不明、近くに埋葬してあった82号と85号は4I型であるので4I型の可能性がある。吉胡128号は4I型、保美0908号は不明である。伊川津2206号は2C型である。J型式と抜歯系列との関係は明言できない。

C型式

春成 1985 では鳥形短剣の小型品とした。吉胡 108 号人骨に伴った例。角幹と第 1 枝の部分加工して、逆し字形にしたものである。奈良県橿原遺跡からこの形態に属する大型の優品が出土しているので近畿系ともいえるが、この形態は元々、縄文中期～後期初めに関東・東北地方に出現・普及していたものである。吉胡 108 号は無抜歯⁽¹⁰⁾、近くに埋葬してあった 107 号、109 号は 4I 型である。

W型式

春成 1985 では C 形腰飾り a 類・b 類とした。

Wa 式 猪の牙を帯留め形に加工し、中央に大きな孔、その片端に小さな孔をあけている。吉胡 271 号例は幼児骨に伴っていた。伊川津貝塚では貝層中から破片が 1 点出土している。

Wb 式 獣類の第 1 頸椎の臼状部に大きな孔、棘状突起に小さな孔をあけている。吉胡 94 号例は家犬の骨製品、143 号例は狐の骨製の小型品である。紐通しの孔は小さいほうで、中央の大きな孔はむしろ形態のうえで必要であったようである。吉胡 94 号例は女性で抜歯は 4I 型、143 号例は男性で無抜歯である。

なお、材料はまったく異なるが、大阪府国府 1906 号女性人骨に伴った獣骨製品は、飾り用の大きな孔をもっており、この型式と類似する。さらに V 型式とも共通するところがあり、両者は関連をもっている可能性がある。

I 型式

春成 1985 では骨製両頭腰飾りとした。保美 2506 号人骨に伴った 2 例（うち 1 例は半欠品）。獣骨製で、スペード形の頭を両端にもつ I 字形をしている。人骨は女性で抜歯は 4I2C 型である。

以上のうち、最後の W 型式と I 型式の腰飾りは人骨の腰付近から見つかったので、これまで「腰飾り」と呼んできたけれども、鹿角製品ではなく、特異な形態をもち、装着していた 3 例はそれぞれ女性、無抜歯、幼児で例外が重なっている。これらの形態は例数も少なく、他の腰飾りと同列に扱って議論するのはさけたほうがよいかもしれない。そのような扱いをすれば、鹿角製腰飾りの着装者は男性 23 例、女性 1 例となり、成人男性専用の装身具という特徴はあっさり明瞭になる。女性が鹿角製品を着けた唯一の例は、出土状況に問題がないとすれば、男性に適格者がいなかった事態のもとでの特別の措置であったと考えるほかない。

(2) 腰飾りの諸型式と出身集団

吉胡貝塚から出土した腰飾りは 26 点あり、出土数をもっとも多く、ほとんどの型式を含んでいるので、吉胡貝塚でのあり方を基準にして腰飾りの意味を考えてみることにしよう。吉胡貝塚に多い腰飾りは、L 型式、Y 型式、V 型式である。そして、もっとも多い L 型式の腰飾りをつけた人の抜歯型式は 4I 型 10 例、2C 型 1 例であるから L 型式の腰飾りが 4I 型抜歯と密接な関係にあることは明らかである。それに対して、Y 型式の腰飾りの抜歯型式は 2C 型 1 例、2C1I 型～2C2I 型 2 例、無抜歯？ 1 例で 4I 型は皆無である。V 型式の腰飾りの抜歯型式は、2C 型 1 例、2C2I 型 1 例、4I2C 型 1 例、あと 2C 型の可能性があるのが 2 例で、4I 系は 1 例だけである。Y 型式と V 型式の

腰飾りは、2C系との関係の深さを示唆している。腰飾りの形態と抜歯型式は一定の対応関係を示していると考えてよいだろう。J型式の腰飾りの抜歯型式は4I型が1例、4I型の可能性がある1例、2C型が1例であるので判断できない。C型式の1点は無抜歯であった。

吉胡と伊川津は、縄文後期末に始まる大規模な貝塚を伴う、渥美半島に縄文後期に現れた集団の開祖に当たる集落跡である。しかし、腰飾りの数をくらべてみると、吉胡貝塚では出土した成人骨約250体に対して腰飾りの出土数は26点、10%であるのに、伊川津貝塚では出土した成人骨推定150体に対して腰飾りの出土数は6点、4%にすぎない。吉胡貝塚では腰飾りは総数だけでなく、L型式も、Y型式もV型式も圧倒的に多く、さらに最古のL1式を含んでいる。東海地方西部の腰飾りの分布の中心に位置する吉胡貝塚は、特別な集団がのこした遺跡であって、L型式の腰飾りは吉胡集団を代表する標章であったと考えてよいだろう。

それに対して、伊川津貝塚ではY型式とV型式の腰飾りの未完成品が出土しているので、Y型式とV型式の腰飾りは伊川津集団を代表する標章として伊川津集団で製作し、吉胡貝塚出土の2C系抜歯に伴うY型式とV型式の腰飾りは伊川津集団から婚入者とともにもたらされたと解釈したいところである。しかし、Y型式の腰飾りは伊川津貝塚から2例、刈谷市本刈谷貝塚と名古屋市玉ノ井遺跡からそれぞれ1例出土しているだけで、吉胡貝塚の5点より少ない。V型式の腰飾りは他には名古屋市雷貝塚から1例見つかったにすぎず、吉胡貝塚の4点とくらべると問題にならない。

伊川津貝塚ではY型式とV型式の腰飾りは2C型に伴い、L型式の腰飾りは4I型抜歯に伴っており、吉胡貝塚でのあり方と基本的に一致する。しかし、伊川津貝塚では吉胡貝塚に比べると腰飾りの出土数がひじょうに少ないのは問題である。伊川津貝塚では1922年以来のたび重なる発掘で埋葬人骨が190体以上発掘されている。そのうちに4I系、2C系とも約40体見つかった。1936年、1937年、1959年の発掘の詳しい報告がなく、腰飾りも実物がのこっていないけれども、4I系抜歯の人にL型式の腰飾り、2C系抜歯の人にY型式やV型式の腰飾りが伴っていなかったのだろうか。

その一方、J型式の腰飾りは吉胡貝塚から2点、伊川津貝塚からは皆無に対して、保美貝塚からは3点、さらに未完成品も出土しているので、J型式の腰飾りが保美集団を代表する標章であった可能性はつよい。しかし、その数は少なく、その時期は新しい。

東海地方では吉胡集団が中心になって腰飾りを着装する条件を定めたうえでその製作を始めたあと、製作と使用の中核的な役割をはたしていた。そして、伊川津集団と保美集団が加わり、これらの3集団にはL、Y、V、J型式の腰飾りを標章とする少なくとも四つの区分単位が成立し、吉胡と伊川津ではL型式の腰飾りは4I系の人がつけ、Y型式の腰飾りとV型式の腰飾りは2C系の人がつけていたと考えておきたい。なお、吉胡と保美でJ型式の腰飾りをつけていた人の抜歯系列については確言できない。

③……………又状研歯と抜歯系列

(1) 又状研歯の抜歯型式

又状研歯を施した人骨は、愛知県の6遺跡、大阪府の1遺跡からこれまで29例見つかった[春成2002:207～220]。最近、吉胡貝塚と奈良県観音寺本馬遺跡からそれぞれ1例出土の報告があったので[増山・坂野編2007, 本村2009, 鈴木2010]、現在では31例知られていることになる。又状研歯は以上の計8遺跡のうち吉胡貝塚と伊川津貝塚からそれぞれ9例出土しており、この2遺跡が他を圧倒している。又状研歯者の抜歯型式と性別の関係は、4I型が男性9例、女性11例、4I2C型が男性1例、女性4例、2C2I型が男性2例、0型が女性1例、抜歯型式不明が男性1例、抜歯型式・性別不明が2例である⁽¹⁾(表1)。

又状研歯を施した人物31例のうち4I型と4I2C型を合わせると25例に達する。そして、のこりの人のなかには2C2I型が2例存在する。4I2C型と2C2I型については、それぞれ4I型、2C型との合葬例が存在する一方、その逆の合葬例は1例も知られていない事実から、4I型は2本の犬歯を抜いて4I2C型になり、2C型は2本の切歯を抜いて2C2I型になると筆者は説明している。

又状研歯を施した人骨のなかには、保美2503号のように壮年で下顎の歯を1本も抜いていない0型が存在する。また、伊川津貝塚で見つかった又状研歯を施した男性3体の合葬例[鈴木1940]では、約30歳の3645号と3646号は研歯が未完成である一方、20歳未満の3644号は完成している[春成2002:209～210]。このような事実から、又状研歯は成人式を経てまもなく施したと筆者は推定する。さらに、又状研歯を施した人は4I型が圧倒的に多い事実から、又状研歯は4I系の祖先とのつながりをあらわす標章であって、特定の家系に生まれ婚姻成立後も出身集団で配偶者を得ることが約束されているような特別な身分の人で、抜歯の手術をおこなうのは彼ら彼女らであった

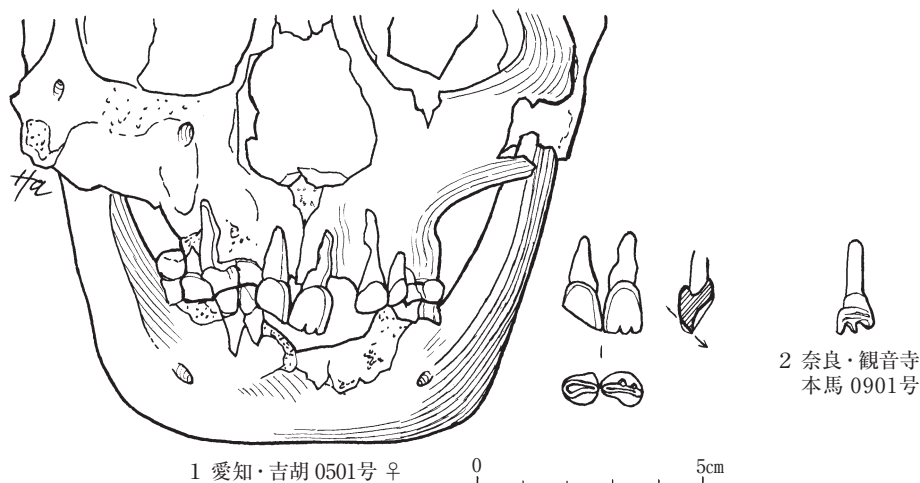


図5 又状研歯の新資料 1 抜歯4I型(RC2I²/2I₁I₂)

1は上顎左中切歯に2条の刻線をわずかにのこしている。右中切歯にも刻線があったはずであるが、咬耗によって失われている。推定身長147cm、1～2回の出産歴をもつ熟年女性骨である。2は上顎左中切歯に2条の深い刻み目。女性か。

表1 叉状研歯の性・年齢と抜歯型式

人骨番号の前2桁は発掘した西暦年の下2桁、後2桁は人骨の取りあげ番号を示す。ただし、吉胡貝塚の清野謙次発掘人骨は1922年(1~236号)-1923年(237~304号)の2年分の通し番号だけで示す。

愛知県田原市吉胡

- 21号(女, 熟年, 4I2C型, 軽屈葬)
- 35号(女, 壮年, 4I型, 上肢強屈・下肢やや軽屈葬)
- 85号(男, 熟年, 4I型, 腰飾りL1式を着装, 屈葬)
- 120号(男, 壮年, 4I型, 腰飾りL3式を着装, 軽屈葬)
- 280号(男, 熟年, 4I2C型, 上肢強屈・下肢軽屈葬)
- 5113号(女, 熟年, 4I2C型, 座位屈葬)
- 5117号(女, 熟年, 4I型, 座位屈葬)
- 5121号(女, 熟年, 4I2C型, 座位屈葬)
- 0501号(女, 熟年, 4I型, 座位屈葬, 「縄文晩期前葉以前」)(図5)

愛知県田原市伊川津

- 2209号(女, 壮年, 4I型)
- 2221号(女, 壮年, 4I型)
- 2222号(女, 若年, 4I型)
- 22E6号(女, 熟年, 4I2C型)
- 3744号(男, 若年, 4I型, 伸葬, 3645号・3646号と3体合葬)
- 3745号(男, 壮年, 4I型, 軽屈葬)
- 3746号(男, 壮年, 4I型, 伸葬)
- 5913号(男, 壮年, 4I型)
- 8419号(男, 熟年, 4I型, 再発掘・不明)

愛知県田原市保美

- 2503号(女, 壮年, 0型)
- 6307号(男, 老年, 4I型)

愛知県小坂井町稲荷山

- 2235号(男, 熟年, 4I型?, 保存不良)
- 2237号(男, 熟年, 4I型, 屈葬)

愛知県西尾市枯木宮

- 7205号(女, 壮年, 4I型)
- 8009号(女, 若年, 4I型)

愛知県安城市堀内

- 77118号(男, 成年, 4I型)

愛知県刈谷市本刈谷

- 6901号(男, 壮年, 2C2I型)

愛知県名古屋市雷

- 2702号(性不明, 成年, 上顎左中切歯のみ遊離出土, 切縁の咬耗状態から推定すると4I型)

大阪府藤井寺市国府

- 1909号(女, 壮年, 4I2C型)
- 5803号(男, 壮年, 2C2I型)
- 7001号(女, 壮年, 4I2C型, 屈葬)

奈良県橿原市観音寺本馬

- 0901号(女?, 成年, ?, 成人3体・乳幼児2体と再葬, 遊離出土した上顎左中切歯。長さ2.1cm, 幅0.8cm)(図5)

と考える。そうであれば、2C系の人たちの抜歯を担当していたのも4I系の人であったから、抜歯を伴う儀礼を主導したのは4I系のグループであったことになる。そのように考えたばあい、吉胡では男性3例、女性6例であるから、男性が少ないのが気にかかる。しかし、又状研歯を施しても、上顎切歯の咬耗が進むと、その痕跡はなくなってしまう。また、発掘した時に上顎切歯が遺存していなければ又状研歯の存否は確認できない。吉胡貝塚で男性例が少ない理由は、これらのことがかかわっている可能性がある、この問題について、これ以上の言及はさけない。

(2) 又状研歯の年代

又状研歯の人骨の年代については従来、漠然と「縄文晩期」と理解されてきたが、それ以上に年代についての詳しい考証はなかった。そこで、あらためて細かな年代について整理しておきたい。手がかりは、墓坑と土層との関係、装身具の型式、埋葬姿勢である。

吉胡85号はL1式の腰飾りを伴い屈葬であるので、晩期初めないし晩期前半の可能性がよい。吉胡5113号、5117号、5121号、0501号は、近接して埋葬されており、いずれも屈葬、晩期初めないし前半で古い。それに対して、吉胡120号はL3式の腰飾りを伴っており、軽い屈葬であって、晩期中頃以後で新しい。同21号、35号、280号もすべて軽い屈葬であり、新しい。

伊川津3744、3745、3746号は合葬で、うち2体は伸葬であるので、晩期中頃以後までくだる可能性がよい。

稲荷山2235号、同2237号は、この貝塚の年代から判断すると晩期中頃～末であろう。

保美2503号は屈葬であったから、晩期前半～中頃であろう。

堀内77118号は、晩期中頃の桜井式の時期とされている。

奈良県観音寺本馬0901号は、周辺出土の土器から篠原式（滋賀里Ⅲb式）に限定できるとい⁽¹²⁾う。

以上にみてきたように、又状研歯の人骨は縄文晩期の初めから後半まで存在するようであるが、晩期初めから中頃に多いことだけは指摘できるだろう。

④……………再葬と抜歯系列

(1) 伊川津貝塚の再葬

伊川津貝塚の1984年の発掘区（図6）で筆者らは、不自然な埋葬に数多く遭遇した〔小野田・春成・西本編1988〕。3体分の四肢骨と頭骨を四角形に配列した8401号墓、2体の不完全な人骨を一つの墓穴に納めた8404号墓、13体分の不完全な人骨を一つの墓穴に納めた8406号墓、2体分の男女の骨を納めた8411号墓、2体の男女の全身骨を埋めた8412号墓、左腕の骨だけがのこっていた8418号墓、指骨の一部だけがのこっていた8421号墓と8422号墓、さらに貝輪1点だけで人骨がのこっていなかった8424号墓である（図7）。それらの人骨のうち、抜歯型式が判明した8401-2号、8404-1号、8406-1・3・5・6・7・8・11・12号、8411-1号、8412-2号例はすべて2C型であった。

筆者は、これを1度埋葬した遺体が骨化したあと、掘り出し別の墓穴に再埋葬した遺構と、掘り出したさいに人骨の一部を取りのこした元の墓穴の遺構であるとみなした。伊川津8406号墓の13

体の人骨群は、男性2体(2体とも2C型)、女性8体(うち6体は2C型、2体は不明)、幼児3体からなっていた。歯冠計測値と頭蓋骨小変異の検討を田中良之・土肥直美に依頼したところ、その調査が可能であった8体のうち5体に鼓室骨裂孔を認め、8406号墓の少なくとも男女5体の人骨同士でなんらかの血縁関係が存在すると彼らは結論づけた。しかし、8406号墓の人骨群と他の10体の人骨との間には、血縁関係の存在を確認し得なかった。そこで、8406号墓の被葬者は「同じ集落の出身者によって形成された場合」と、「婚入者が死亡すると出身集落の墓地へと帰葬された場合」を想定した。そして、2C系を婚入者とする筆者の仮説については、「棄却される場合もあり得る」ことを指摘した〔田中・土肥1988:424~425〕。

しかし、伊川津貝塚から出土している4I系同士、さらには4I系と2C系との間で血縁関係の有無が調査されていなかったため、総合的な判断をくだすことは不可能であった。また、13体のなかに含まれている3体の幼児の取り扱いも容易に解決できない問題であった。

その後、縄文後期初めの関東地方で見つかる多人数の合葬再葬墓について、小集落を大集落に再編するさいに、それぞれの墓地に埋葬していた遺体を掘り出し、新しい集落の一角に集めて再埋葬し集団統合のモニュメントにしたとする説を山田康弘が提示した〔山田1995〕。

この考えを伊川津貝塚に応用して、縄文晩期の東三河に、2C系の死者の遺体を出身集団の墓地に戻して埋葬する風習があったとすると、死亡後にただちに遺体を出身集団に運んで埋葬すれば屈葬や伸葬になるし、婚出先の集団の墓地に1度埋葬し、骨化したあと遺骨を出身集団に運んで埋葬すればそれは再葬になる。すなわち、伊川津8401号、8404号、8406号、8411号、8412号墓の被葬者は、伊川津から他集団に婚出していた人たちであって、死後の一定期間は他集団の墓地に埋葬され(個々の人骨の保存部位からすると、埋葬の期間は個体ごとにまちまちであったろう)、ある時点で掘り出して伊川津の墓地に移す一方、8413号、8418号、8421号、8422号、8424号墓の遺骨の大部分は、吉胡貝塚など他の遺跡の墓地に移して再葬したと考えてみよう。そして、8402号、8408号、8410号、8416号、8417号墓のような2C型で単葬例は、伊川津集団の出身者で、婚姻後も伊川津に住み死亡したあと、遺体を伊川津の墓地に埋葬したと考えてみよう。その一方、伊川津貝塚で1922年、1936-37年、1959年に小金井良精、浦良治、鈴木尚の発掘によって4I系の抜歯人骨が

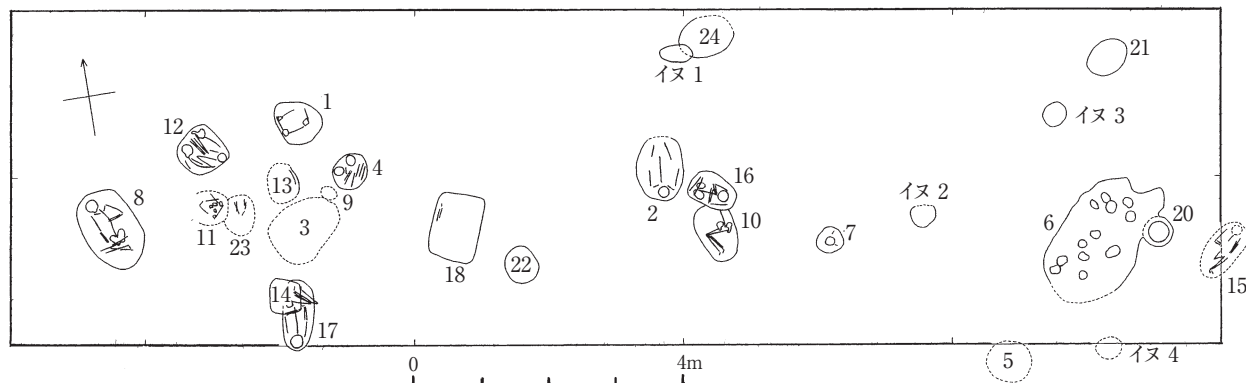


図6 愛知県伊川津墓地の単葬墓と再葬墓の分布状況〔小野田・春成・西本編1988〕

1984年の伊川津会館を建て直すための発掘調査区では、2C系の抜歯人骨だけが出土した。葬法は単葬(初葬のまま)、再葬と、人骨の大部分を取り去り、ごく一部だけのこった初葬の跡が見つかった。

多数出土した西側の発掘区では、詳しい内容は不明であるが、出土人骨 123 体のうち 50 体は「散乱人骨」であった [河合 1972]。「散乱人骨」の多くは再葬と関係しているとすれば、4I 系の死者もひじょうに高い頻度で再葬の対象になっていることになる。伊川津集団の 4I 系の人たちも、伊川津集団で生涯をおくり伊川津の墓地に埋葬された者、他集団から婚入して死後に出身集団の墓地に帰葬された者と、伊川津集団から他集団に婚出し死亡後に伊川津の墓地に帰葬された者とがいた可能性⁽¹³⁾がある。

2004 年に詳しい報告があった保美貝塚 75-1 号集積は 14 体以上(男 4 体, 女 6 体, 不明 1 体, 幼児 3 体)からなり、抜歯型式がわかる 2 体は 2C 型であった [水嶋ほか 2004]。その内容は、伊川津 8406 号墓にきわめて近い。保美 75-B 集積の 6 体以上 (男 3 体, 女 1 体, 幼児 1 体, 抜歯型式不明) と合わせ、別の墓地に埋葬してあった人骨をまとめて保美に移葬したと考えることが可能であろう⁽¹⁴⁾。これらのなかに幼児の骨を含んでいる事実は、吉胡貝塚で小児・少年の「不完全人骨」が少なくなかったことと合わせ考えると、幼児～少年の段階ではまだ片方の親すなわち抜歯の 2C 系のグループに帰属していたか、それとも生涯 2C 系のグループと決まっていたので、死後はその親と同じように再葬したと考えることができる。

(2) 吉胡貝塚の再葬人骨の抜歯型式

吉胡貝塚でも多かった「不完全人骨」と「散乱人骨」[清野 1969: 204～210] を、再葬と、再葬するために人骨を不完全に取りだした跡と筆者は考えた [春成 1988, 2002: 340～341]。吉胡貝塚では、遺体の上に小さなマウンドを築き、その上に石塊による墓標を立てていた例が見つかっている (図 8) [増山・坂野編 2008: 63]。このような外表施設をもっているならば、1 度埋葬した 2C 系の人の遺体を再葬のために掘り出すことは容易であっただろう。

清野謙次の報告から不完全骨・集積骨と散乱骨とを抜き出し、それらの抜歯型式について調べてみよう (表 2)。

それらは 2C 系 (2C 型と 2C2I 型) が 14 例 (男 10, 女 4) に対して、4I 系 (4I 型と 4I2C 型) が 11 例 (男

表 2 吉胡貝塚の不完全骨・散乱骨の抜歯型式と性

4I型	計7例
不完全骨	171号男, 184号男, 185号男, 186号男, 262号女
散乱骨	264号男, 265号男
4I2C型	計4例
不完全骨	109号男, 183号男, 282号女
散乱骨	223号女
2C型	計12例
不完全骨	3号女, 4-1号男, 4-2号女, 9号女, 0505号男, 147号女, 164-1号男, 164-2号男, 164-3号男, 181号女
散乱骨	87号男, 231号男
2C2I型	計3例
不完全骨	48号男, 131号男, 234号男

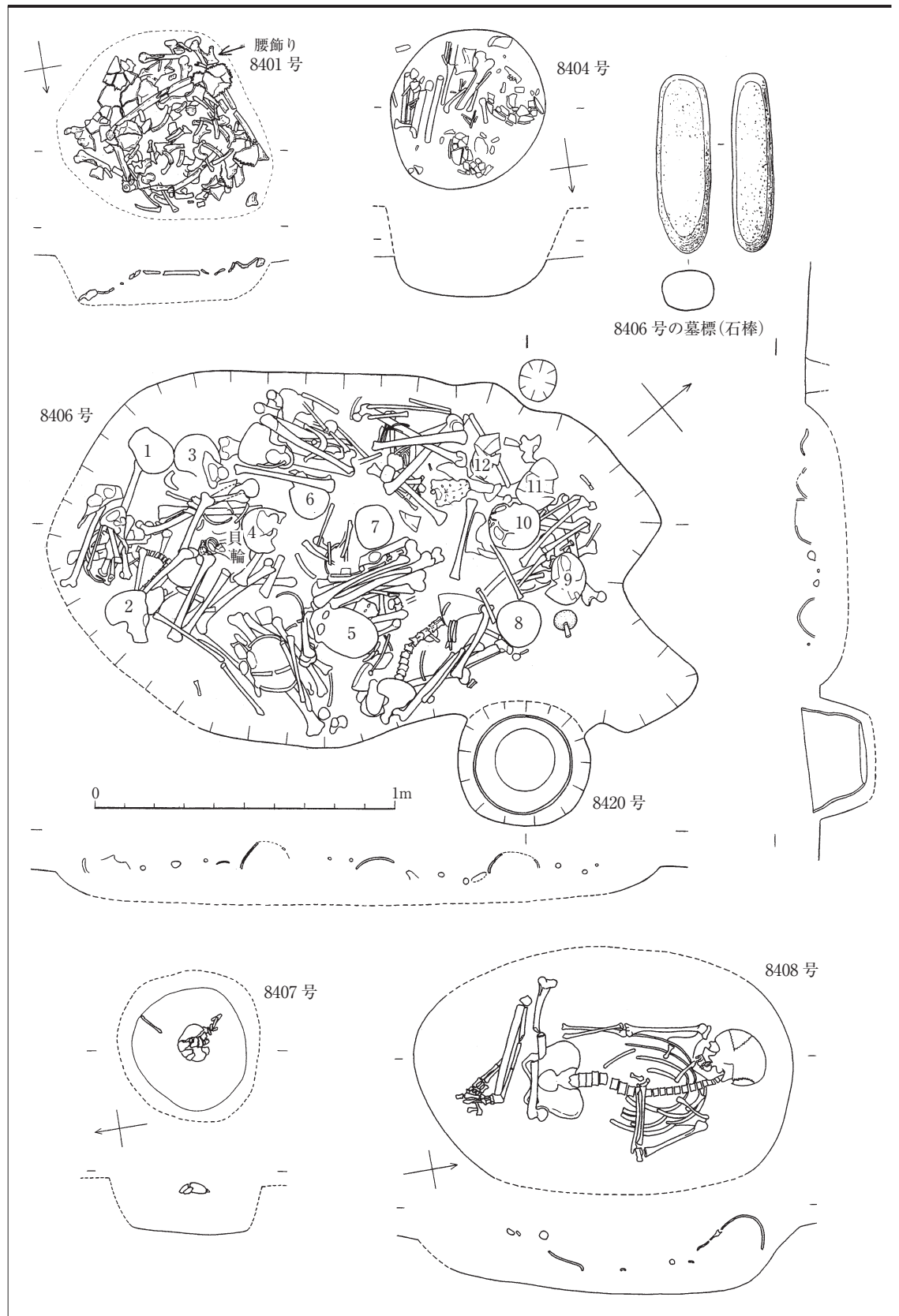
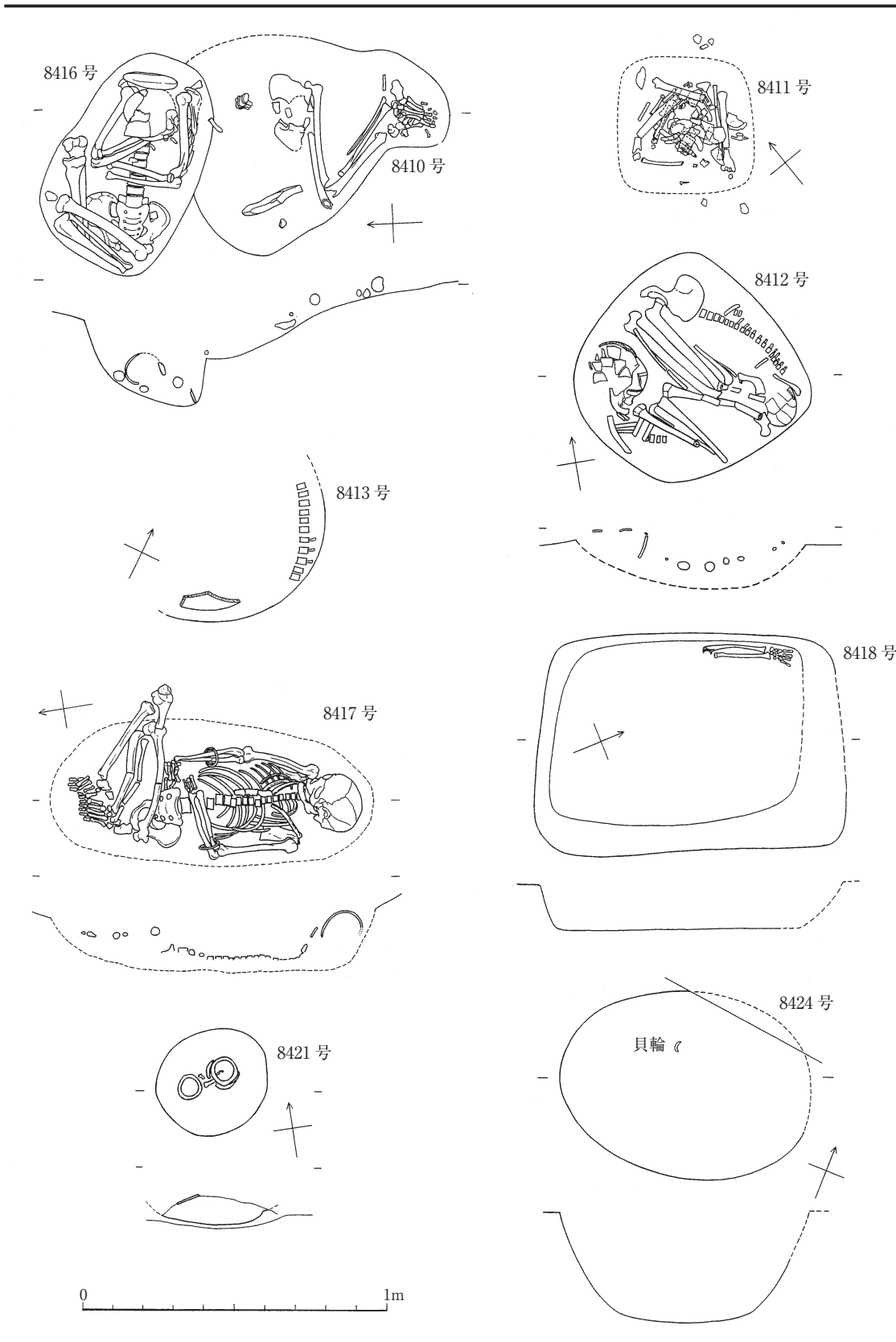


図7 愛知県伊川遺跡の埋葬例 [小野田・春成・西本編1988]

8401号 男3体, 盤状集積墓, Y1式腰飾り。8404号 女1, 幼児, 合葬, 初葬。8406号 男2, 女8, 幼児3, 13体再葬墓。
8420号 乳歯1本のみ, 甕棺墓。8407号 1歳児, 初葬?。8408号 男1, 屈葬。



8416号 男1, 屈葬。8410号 女1(下半身のみ), 不明1, 初葬。8411号 男1, 女1, 盤状集積墓。8412号 男1, 女1の再葬墓。8413号 頭骨の一部と脊椎骨の一部, 初葬。8417号 女1, 貝輪を3個着装, 屈葬。8418号 左腕骨のみ, 初葬。8421号 指骨と貝輪のみ, 初葬。8424号 貝輪片のみ, 初葬。抜歯は判明するものはすべて2C系である。

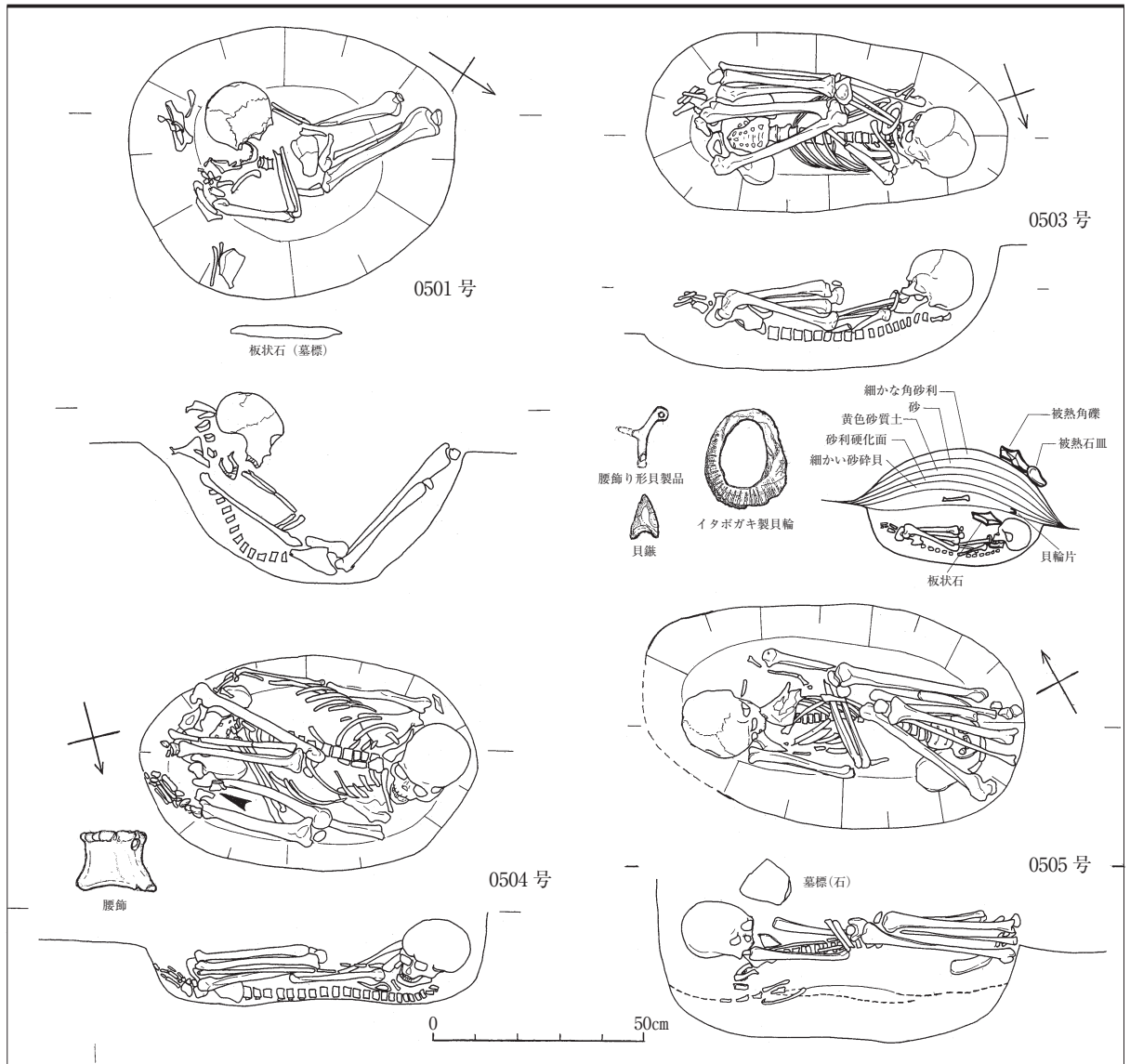


図8 愛知県吉胡貝塚の墓のマウンドと石の墓標, 再葬墓 [増山・坂野編2007]

0501号 再葬?, 4I型, 又状研歯, 女, 熟年。 0503号 単葬, マウンドあり, 2C型, 女, 熟年, 貝輪, 貝製腰飾り模造品。 0504号 単葬, 2C型, Y型式腰飾り, 男, 壮年。 0505号 再葬, 2C型, 男, 壮-熟年。 0503号のように, 遺体を埋葬した上にマウンドを築き, 石を置いておけば, 後に遺骸を掘り出すことは容易であったらう。

8, 女3) であるから, 2C系も 4I系も再葬の対象になっている。

4I型7例の出土状態を検討すると, うち3例(184号~186号)は187号(抜歯型式不明)を含む4体分の「不規則な堆積」状態であったと清野は記述し, 盤状集積や不完全骨・散乱骨とは別の扱いをしている。171号と262号は不完全骨, 264号と265号は散乱骨であるが, その詳細は明らかでない。

吉胡貝塚の最近の発掘資料では2C型抜歯の0505号人骨が埋葬前に解剖学的な配列が乱れており, 埋葬状況に不自然さがあった [増山・坂野編2007: 68~72]。この例は, 他所に埋葬してあった遺体を移葬した可能性が大きいとみるべきであろう。

のこされている情報が少ないために, ここでは2C系抜歯にも4I系抜歯にも不完全骨おそらく

再葬例が存在することに留意しつつ先に進むことにしよう。

(3) 盤状集積人骨の抜歯型式

人の四肢骨を四角形ないし五角形に配列し頭骨をその四隅やその内部においた盤状集積葬は、東海地方でのみ知られている典型的な再葬の方法で、1個体分から4個体分を集積した例までである。盤状集積人骨はこれまでに8例見つかっている（表3）。

表3 盤状集積人骨の性・抜歯型式

田原市吉胡44号	1体(女1体, 2C型)
田原市吉胡164号	4体(男4体, 4体とも2C型)
田原市伊川津8401号	3体(男3体, うち1体は2C型, 他は不明)
田原市伊川津8411号	2体(男2体, うち1体は2C型, 他は不明)
田原市保美B区B集積	最少6体(男3体, 女2体, 幼児1体, うち2体は2C型, 他は不明)
西尾市枯木宮7201号	1体(幼児1体)
刈谷市本刈谷6906号	1体(男1体, 抜歯型式不明)
刈谷市宮東	3体(詳細未報告)

盤状集積の人骨の性は、男性7例、女性3例で男性が多く、抜歯型式がわかる9例の成人はすべて2C型である。

なお、伊川津貝塚で4I系抜歯の人骨が多い地区を発掘した小金井良精や鈴木尚が、盤状集積の存在についてふれていないのは、4I系と盤状集積とは結びつきがないことを示唆しているのかもしれない。

盤状集積人骨のばあいも、他集落で死亡し埋葬したあと、ある時点で骨を掘り出して出身集団の墓地に移葬したと考えることができるだろう。

⑤……………吉胡貝塚の墓地構成

(1) 吉胡墓地の群別と叉状研歯・腰飾りの分布

吉胡貝塚の墓地では、叉状研歯を施した人骨9体、腰飾りを伴う人骨28体を含めてこれまでの調査で約350体の人骨が出土している（図9、図10）。しかし、規模が大きく墓地を全域にわたって発掘しているわけではないので、墓地全体の形状や埋葬遺体の総数について決定的なことをいえる状況にない。筆者は、吉胡貝塚の人骨の分布状態を初めて注視したときに遺体の分布に疎密があり群別が可能なのに気づいたので、密集して分布する遺体のまとまりを埋葬小群と呼び、墓地の形状の把握につとめた結果、二つの環状墓地が一部交錯する形態に復元することができた。今回はそれを西大群と東大群に分けて分析し、その意味を考えてみたい。

吉胡墓地は、発掘した中心部分に限って、人骨の密集状態から大きく群別すると、西c小群、西

b小群, 西a小群, 東a小群, 東b小群, 東c小群, 南a小群, 南b小群の9群を識別することができる。さらに, 西a小群の東南に西d小群, 西a小群の東南に西e小群などの小規模の小群が存在し, 南b小群の東からはL3式の腰飾りを伴う人骨が見つかったので, さらに1小群の存在を予想できる(図11)。ただし, 小群間に列石や溝などは存在しないので, 群別が厳密性を欠くことは避け難い。

なお, 西a小群から東a小群にかけて貝層中に埋葬した新しい埋葬群が重なっている。土器棺は上部が貝層中に埋まっている例が多く, 西小群から南小群までの間に散在している。土器型式は縄文晩期中頃の元刈谷式から弥生前期末の水神平式にわたっている。元刈谷式は1例だけで, 稲荷山式がもっとも多く, 五貫森式, 馬見塚式, 樫王式, 水神平式はそれほど多くない。⁽¹⁵⁾ 縄文後期末~晩期初めまでさかのぼる例はないので, 土器棺は吉胡墓地では新しい要素とみることができる。文化財保護委員会が調査した第1, 第3, 第4トレンチから多数見つけた土器棺の年代は馬見塚式以降であるので, 清野謙次の調査区の墓群とは分けて考えることが可能である。貝層中の埋葬を除いたそれぞれの小群の特徴はつぎのとおりである(表4)。

西c小群 西b小群の北に位置する。10体(成人7, 未成人3)からなる小さな小群で, 抜歯の2C系の男性を主体とする。

西b小群 西a小群の西に位置する。38体(成人22, 未成人16)からなる。抜歯の4I系は男女の数に差がなく, 2C系は女性が多い。距離は離れているが2C系を主体とする西北小群は, 西小群に含まれるのかもしれない。又状研歯で4I2C型抜歯の女性1例を含んでいるが, 腰飾りを伴った人骨は1例もない。アカガイの貝輪を伴った女性2例を含んでいる。幼小児骨を納めた土器棺3基は, すべて稲荷山式であるので, やや古い。

西a小群 49体(成人29, 未成人20)からなる。抜歯の4I系は女性に圧倒的に多く, 2C系は男女ともひじょうに少ない。おそらく周辺の2C系の男性4例と女性3例がこの小群と関係をもっているであろう。土器棺は稲荷山式~五貫森式, 馬見塚式?, 五貫森式~馬見塚式, 樫王式, 水神平式の5基であるから, 概して新しい。

又状研歯を施した人骨は, 男性1例, 女性5例で, 吉胡貝塚出土の9例のうち6例までがこの小群に集中し, しかも女性が主である。

人骨に伴った腰飾り5点のうち, 85号人骨に伴ったL1式は吉胡の最古型式とみてよいが, この男性は同時に又状研歯を施した人物である。のこりの92号と5125号人骨に伴った2点はL3式である。92号人骨は, L型式の腰飾りをつけた唯一の女性である。Y1式の腰飾りを伴った0504号人骨は, 貝層下の細礫層に埋葬してあるので古い。J2式の腰飾りをつけた83号(男性?), 犬の第1頸椎製のWb式の腰飾りと貝輪1個を伴った94号女性, アカガイの貝輪を1個つけた抜歯型式不明の41号女性, 11個つけた2C型抜歯の5119号女性と, 2個つけた4I2C型抜歯の5113号女性もこの群に含まれる。

東a小群 西a小群の東に位置する。49体(成人46, 未成人3)からなる。土器棺は9基で, 稲荷山式に始まり, 馬見塚式と樫王式などがある。抜歯は, 4I系と2C系の男女の数が等しいようである。腰飾りを伴った人骨は11例あり, 吉胡墓地ではもっとも多い。

L型式の腰飾り6点のうち, 106号人骨に伴った例はL型式最古のL1式, そのあと104号, 123



図9 愛知県吉胡貝塚の矢崎岩と発掘者の清野謙次 [清野1949]

矢崎岩はチャートの岩塊で、吉胡集落のシンボルとして吉胡集落・墓地の形態を規定している可能性がある。高さ4m、基底部は11m×10mある。1922年、東南から写す。

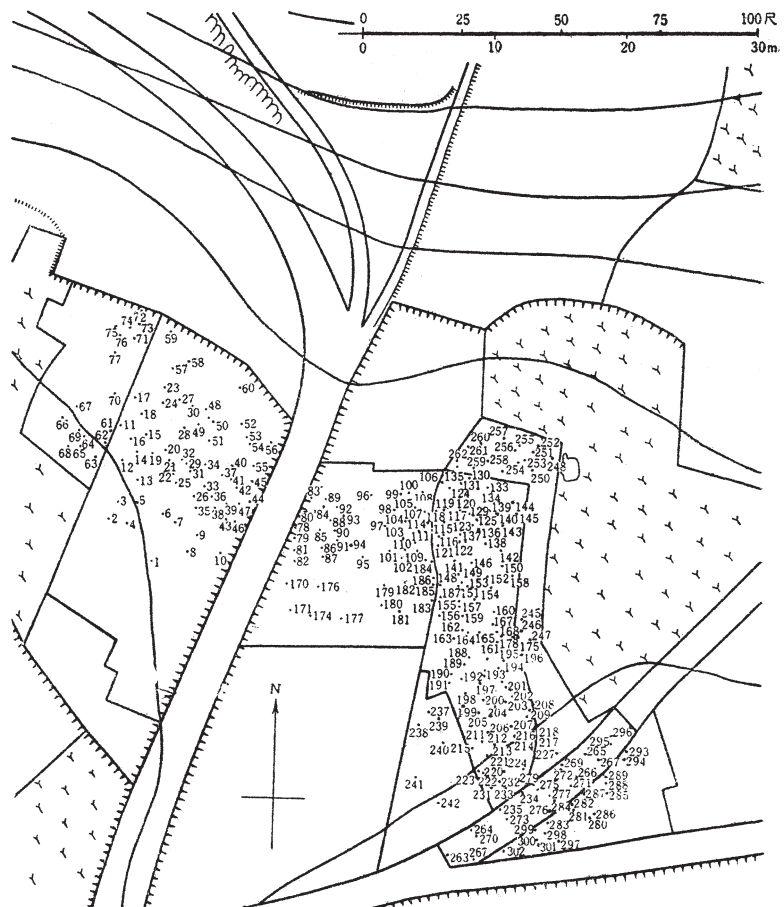


図10 清野謙次による吉胡貝塚の発掘 [清野1949]

清野は1922年10月6日～30日（1号～236号人骨）、1923年3月22日～31日（237号～304号人骨）に吉胡貝塚を宮本博人と発掘した。清野は濱田耕作が岡山県津雲貝塚の発掘で人骨の位置を地形測量図に記したのに学び、はなはだ簡略ではあるが吉胡貝塚でも人骨の出土地点を記録した。90年前に発掘した吉胡貝塚の墓地の分析を現在でも可能にしているのは、この1枚の図をのこしてくれたおかげである。

号人骨のL2式から115号、120号、145号人骨のL3式まで揃っている。103号人骨はY1式を伴っていた。123号人骨は腰飾りのほかに魚の脊椎骨製の耳飾りをつけていた。130号人骨は、V3式の腰飾りのほか猿橈骨製耳飾りを左右に、猪牙製の頭飾り、鹿角製・石製の耳飾りをつけていた。吉胡貝塚で例の少ないC型式の腰飾りを伴った128号人骨、J3式の腰飾りを伴った108号人骨、Wb式の腰飾りを伴った143号人骨も、この群に含まれる。

猪牙を加工して作った腕輪をつけた124号女性と138号性不明の2例、さらに、猿の橈骨製耳飾り、鹿角製球状耳飾りをつけた2C型抜歯の240号女性、石製耳飾りをつけた152号女性人骨もすべてこの群に含まれる。

東b小群 東a小群のすぐ北に位置する。15体（成人11、未成人4）からなり、群の規模は小さい。土器棺は西之山～五貫森式1基、樫王式3基の4基で新しい。抜歯は、4I系が男女とも多く、2C系は男女とも4I系の半分の数である。249号人骨に伴った腰飾りはL2式である。251号人骨に伴ったY2式の腰飾りは、吉胡で新しい例であろう。130号男性人骨は猿の橈骨製耳飾り、152号女性は石製耳飾りをつけていた。

東c小群 東a小群のすぐ南に位置する。25体（成人21、未成人4）からなる。土器棺は樫王式1基だけである。抜歯は、4I系・2C系の男女はほぼ同数の可能性がある。159号人骨だけがV2式の腰飾りを伴っている。吉胡のV型式のなかでは最古例である。

南a小群 東c小群のすぐ南に位置する。50体（成人41、未成人9）からなる。土器棺は元刈谷式、稲荷山式、西之山式～五貫森式の4基で、全体としてやや古い。抜歯は、4I系の女性が少ないが、2C系の男女はほぼ同数である。又状研歯の人骨は1例もない。

L2式の腰飾りを伴った232号人骨と、Y1式の腰飾りを伴った203号、238号人骨は群内に分散している。出土の点数は少ないけれども、Y型式がL型式よりも多いことに注意したい。

南b小群 南a小群のすぐ南に位置する。37体（成人31、未成人6）からなる。土器棺は稲荷山～馬見塚式1基と水神平式3基の4基であるから新しい。抜歯は、4I系は男女ほぼ同様に、2C系は女性のみである。東南a小群と南b小群と合わせると、4I系は男性8例、女性5例に対して、2C系は男性5例、女性7例となり、釣り合いがとれている。

又状研歯は280号男性1例が4I2C型抜歯である。L2式の腰飾りを伴った293号人骨、V3式の腰飾りを伴った278号と300号人骨がある。この小群では、V型式がL型式よりも多いことに注意したい。271号幼児骨に伴ったWa式もこの群に含まれる。

南c小群 南b小群の東に位置する。田原市教育委員会の0416トレンチ発掘で見つかった0402号1体だけである。0402号人骨は、抜歯の4I型でL3式の腰飾りを伴っている。南b小群から離れているので、この付近に別の小群があると予想しておく。

(2) 吉胡墓地の形成過程

吉胡貝塚では、20～30体の成人遺体からなる埋葬小群は5ないしそれ以上存在する。そして、いくつかの埋葬小群からなる西大群と東大群はそれぞれ弧状を呈し、それらは交錯するような形で分布している。問題は、これらの埋葬小群と埋葬大群の形成は同時併行的に進行したのか、それとも大小の埋葬群は長い歳月をかけて埋葬位置を点々と移動しながらのこした結果なのか、そして吉

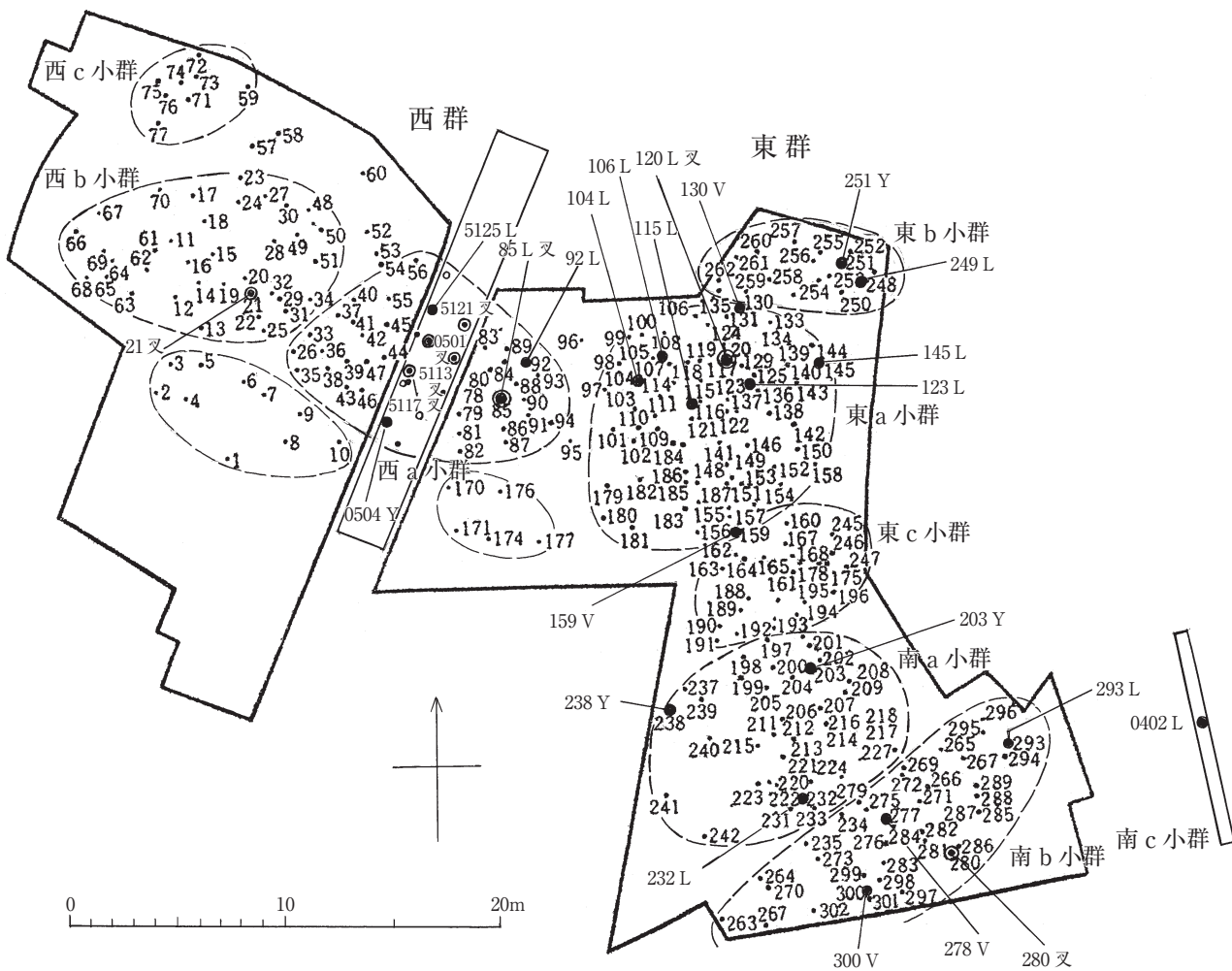


図11 愛知県吉胡墓地の大群と小群 (春成原図)

大きくは西群と東群に分けることができるが、それぞれさらに細分できる。L, Y, V, Jは腰飾りの型式、又は叉状研歯を示す。

表4 吉胡墓地の群別

成人骨の数だけを取りあげ、/の左は男、右は女を示し、総計は性不明を含めた数である。

	4I系	2C系	系不明	男/女	計	総計	叉状研歯	腰飾り					
西c小群	0/0	2/2	0/1	2/3	5	10	0/0						
西b小群	6/7	1/4	1/3	8/14	22	38	0/1						
西a小群	3/11	4/2	4/5	11/18	29	49	1/5	L3	Y1	J1	W1		
東a小群	6/7	6/2	3/9	15/18	33	46	1/0	L6	Y1	V1	J1	C1	
東b小群	0/1	0/0	2/4	2/5	7	15	0/0	L1	Y1			W1	
東c小群	2/2	1/3	7/4	10/9	19	25	0/0			V1			
南a小群	5/1	5/4	3/5	13/10	23	50	0/0	L1	Y2				
南b小群	3/4	0/3	3/7	6/14	20	37	1/0	L1		V2			
南c小群	1/0	0/0	0/0	1/0	1	1	0/0	L1					
合計	26/33	19/20	23/38	68/91	159	271	3/6	L13	Y5	V4	J2	C1	W2

胡貝塚の墓地をのこしたのは吉胡に居住していた集団だけであったのか、という点である。

吉胡の埋葬群の時期を推定する手がかりは、①埋葬群周辺の貝層の形成時期はいつか、②貝層下に埋葬しているか、それとも貝層中に埋葬しているか、③屈葬か、伸葬か、④土器棺の土器型式は何か、⑤伴出した腰飾りの型式は古いか新しいか、である。

しかしながら、清野謙次が発掘した埋葬群の形成時期を判断することは容易でない。たとえば、貝塚の形成時期をみると、西大群に含まれる西 a 小群を縦断している文化財保護委員会の 1951 年の第 2 トレンチ付近は、後期末の吉胡 K1 式に始まり晩期末の馬見塚式ないし「晩期直後」の水神平式の時期までおよんでいる一方、東大群に近い矢崎岩の西にいた第 3 トレンチ、南にいた第 4 トレンチ付近の貝塚もまた後期末に始まり「晩期直後」までつづいており、西大群と東大群との間に時期差が存在することを示唆していない。

その後、田原市教育委員会は第 2 トレンチを再発掘し、掘り残してあった貝層下の人骨 5 体を見いだした。墓穴を掘りこんだのは「晩期前半以前」と判定する一方、東よりの 16 トレンチの土層下で見いだした腰飾りの L3 式を伴った 0402 号人骨の時期は「晩期？」と判定している [増山編 2007: 26]。どちらも墓穴の底は基盤の砂利層に達しており、墓穴の深さだけでは人骨の時期を判断できない。

貝層下の埋葬よりも時期が新しい貝層中に墓穴をもつ埋葬についても、西 a 小群の東端から東 a 小群の西端、南 a 小群の北端に多いことを指摘することはできるが、貝層下の埋葬は西大群だけでなく東大群にも多い。貝層中の埋葬例は、貝層下の埋葬群からは切り離して新しい時期の独立した埋葬群ととらえたほうがよいだろう。

屈葬よりも時期がくだる伸葬も、貝層中の埋葬と同じような分布傾向をもっている。

甕棺については、水神平式が西大群の西 a 小群に少しあり、東大群の東 b 小群、東 a 小群、南 a 小群に多いことは明らかであるので、吉胡墓地の埋葬の中心が最後は東大群に移っていることだけはいえる。

ちなみに、炭素 14 年代を測定した人骨 [Kusaka *et al.* 2009: 2295] の較正年代は、西 a 小群の 81 号が約 3050 年前、35 号が約 3000 年前、西 b 小群の 21 号が約 2950 年前であるから、この 3 体に限れば、東から西へ向かって年代が新しくなる。

ここで、議論を前に進めるために一つの仮説をたてるならば、腰飾りの型式の推移と、土器棺の分布を参考にして、吉胡の貝層下の墓地は西の弧をつくる西 b 小群、西 a 小群、東 a 小群の三つ(ないし四つていど)の埋葬小群と考えたい。三つの埋葬小群の間に明瞭な空閑地を認めうるのは、それらの小群が当初から存在し、その後も意識しつづけていた証拠である。西 b 小群、西 a 小群、東 a 小群の内容は、それぞれ大きな特徴をもっている (図 12)。すなわち、① 又状研歯をもつ女性が 1 例存在するだけで腰飾りを伴った人骨は皆無である西 b 小群、② 4I 系の女性が主体を占め、又状研歯を 6 例、しかも女性 5 例、男性 1 例で女性が圧倒的に多い一方、L1 式に始まる腰飾りをもつ人 (男性 4 例、女性 1 例) も多く、又状研歯の女性と腰飾りをつけた男性が対抗するような関係にある西 a 小群、③ 又状研歯は男性 1 例のみで、腰飾りをもつ男性が計 10 例と多く、L、Y、V、J、C の各型式をもち、そのうち L 型式は 1、2、3 の全細分型式を含んでいる東 a 小群である。これらの事実は、たとえば西 b 群は妹 (21 号)、西 a 小群は兄 (85 号) または姉、東 a 小群は弟 (106

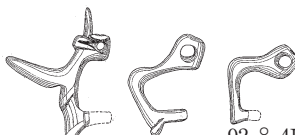
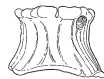

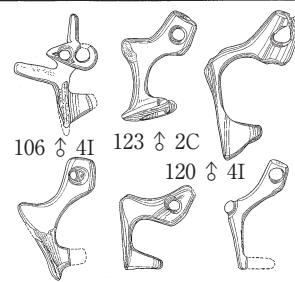


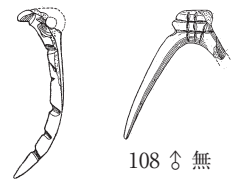
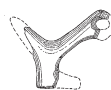



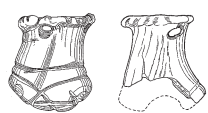

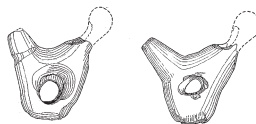
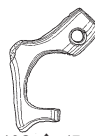
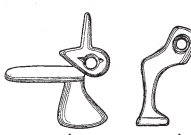



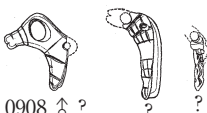
	L 型式	Y 型式	V 型式	J 型式	C 型式
西 a 小群	 85 ♂ 4I 又 5125 ♂ 4I 92 ♀ 4I	 0504 ♂ 2C2I		 83 ? ?	
東 a 小群	 106 ♂ 4I 123 ♂ 2C 120 ♂ 4I 104 ♂ 無 145 ? ? 115 ♂ 4I	 103 ♂ 2C	 130 ♂ ? ?	 128 ♂ 4I 108 ♂ 無	
東 b 小群	 249 ♂ 4I	 251 ♂ ?			
東 c 小群			 159 ♂ 2C2I		
南 a 小群	 232 ♂ 4I	 238 ♂ 1I 203 ♂ ?			
南 b 小群	 293 ♂ 4I		 278 ♂ 4I2C 300 ♂ ?		
南 c 小群	 0402 ♂ 4I				
伊川津貝塚	 5910 ♂ 4I 2210 ♂ ?	 8401 ♂ 2C		 2206 ♂ 2C	
保美貝塚	 09G2j			 0908 ♂ ? ? ?	



図12 愛知県吉胡・伊川津・保美貝塚出土の鹿角製腰飾りの群別・型式別の組み合わせ

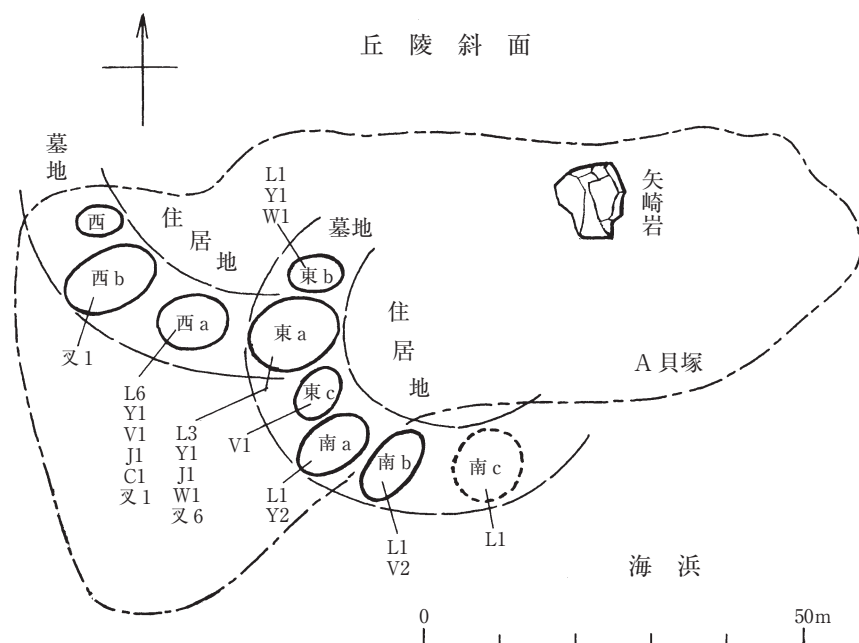


図13 愛知県吉胡貝塚の墓地と集落の形状

吉胡貝塚では墓地と貝塚の範囲がわかっているだけで、集落の位置・形状はわかっていない。ここでは丘陵の裾、西群、東群の墓地の内側にそれぞれ弧状に住居が並んでいたと考えた。又は又状研歯で/の左は男、右は女の数を示す。L, Y, Vなどの後ろの数字はそれぞれの型式の出土点数を示す。

号) というような、それぞれ又状研歯を施すかL型式最古の腰飾りをもつ姉妹・兄弟の関係にあった者を始祖として西大群と東大群が始まったこと、西a小群と東a小群は対抗するような関係であったことを示唆しているのではないだろうか。

その一方、東b・c小群、南a小群、南b小群、南c小群の三つ(ないし四つていど)からなる東大群のうち、南a・b小群は、L2式の腰飾りから始まっているという事実を参考にすると、南a・b大群は東a・b・c小群よりも少し遅れて始まり、墓地は傾向として西・東から東南に拡張していったと推定することもできる。南a・b小群や南c小群が成立するさいに、西a小群や東a小群の構成員の一部が分岐した可能性はある。しかし、西a小群や東a小群がL3式の腰飾りを伴う男性を含んでいることは、南a・b小群や南c小群が成立した後も西a群での埋葬はつづいたことを示している。

又状研歯と腰飾りのあり方をみると、西a小群に又状研歯の女性5例と男性1例が集中し、L型式の腰飾りをもつ男性2例、女性1例を含み、最古のLa式の腰飾りをもつ85号男性もこの小群に属している。85号人骨は又状研歯を施しているから、彼は腰飾りと又状研歯が示す二つの属性を兼ね備えている。その一方、東a小群は又状研歯は男性1例だけであるが、腰飾りはL型式の6点に加えてV型式が2点、Y型式、J型式、C型式、W型式が各1点の合計12点のほかにも装身具を伴う人骨が集中し、最古のL1式の腰飾りをもつ106号男性もこの小群に属している。西a小群と東a小群の双方にL1式の腰飾りをつけた男性が1例存在すること、東a小群には新しい型式のL3式の腰飾りをもち又状研歯を施した120号男性が存在することから、これらの二つの埋葬小

群が吉胡墓地の中心になっていると判断してまちがいないだろう。L型式の腰飾りはさらに東b小群, 南a小群, 南b小群, 南c小群からそれぞれ1点出土していることにも留意しておきたい。また, Y型式の腰飾りは西a小群, 東a小群, 東b小群, 南小群から出土し, L型式と無関係でないことを示唆している。V型式の腰飾りは東a小群と南a小群からのみの出土であるが, やはりL型式の腰飾りと無関係でないことを思わせる。

吉胡の墓地は, 大小7(以上)の埋葬小群から成りたっており, 大きくは西, 東の二つの大群にわかれているとすれば, それらの大群とそれぞれの埋葬小群は, 何を反映しているのだろうか。西, 東の二つの埋葬群をのこした死者たちの大多数は, 生前は吉胡に集落を営んでいたのだろうか, それとも集落は他所にあり墓地だけをこの場所につくっていたのだろうか。

吉胡貝塚の西隣の伊川津貝塚や保美貝塚もそれぞれ多数の埋葬人骨を出土しているけれども, 集落の実態は明らかでない。しかし, 葬送儀礼のために日常生活遺物多数を含むこれだけ大規模の貝塚をのこしたとは思えないから, これらの貝塚では, 墓地は集落に付随していると理解するのが自然であろう。その一方, 吉胡貝塚の東北, 豊川周辺の豊橋市水神, 大蚊里, 菟足神社などの諸貝塚の出土人骨の数は少なく, 吉胡, 伊川津貝塚のそれとは比較にならない。小坂井町稲荷山貝塚の墓地は晩期中頃に中心があり, 吉胡, 伊川津貝塚ほど長期におよんでいない。吉胡貝塚周辺の大きな墓地をのこしていない同時期の集団は, 吉胡にも墓地をもっていた可能性はないとはいえない。吉胡貝塚のばあい, 集落が存在したと考えてよければ墓地と貝塚は重なっており, 前面は海浜が広がり, 背後にはかなり急な斜面が控えているので, 集落のあった場所は限られる。西a小群のすぐ北側や東a小群のすぐ東側の緩斜面に, それぞれ数棟の住居を弧状に配置した集落を想定し(図13), その規模は通常集落を二つ合わせた位でであったと予想しておきたい。東小群~南小群との位置関係からすると, 遺跡の東よりの緩斜面に突出する矢崎岩が集落配置の基点になっているのではないかと筆者は考える。矢崎岩は地表に露出しているところで東西11m, 南北10m, 高さ4mのチャートの岩塊で, 遠方からもよく見える象徴的ともいえる岩である。⁽¹⁶⁾

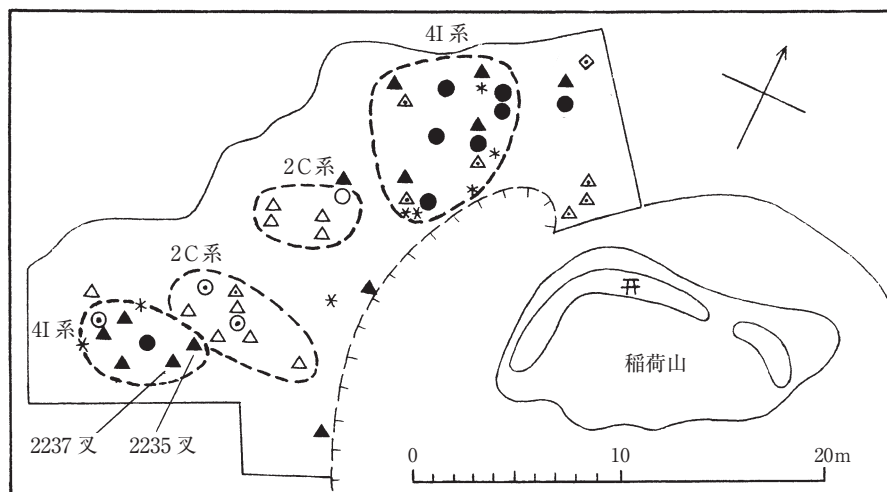


図14 愛知県稲荷山貝塚の墓地の埋葬小群

4I系の遺体(▲男, ●女)のまとまりと2C系の遺体(△男, ○女)のまとまりが
一組で埋葬小群を形成しており, それがいくつか存在する。又は又状研歯を示す。

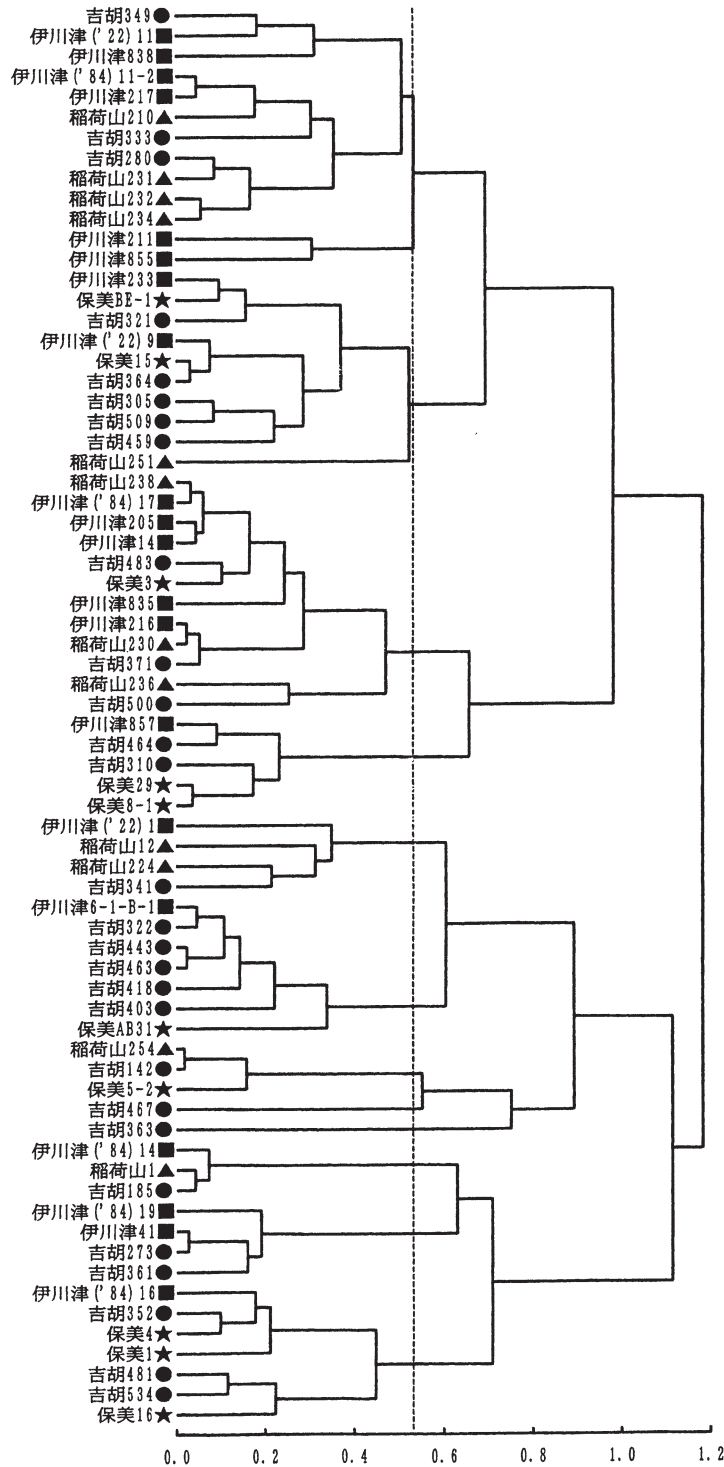


図15 愛知県渥美半島付近の4貝塚の人骨の歯冠計測値にもとづく類似度 [松村2000]

● 吉胡, ■ 伊川津, ★ 保美, ▲ 稲荷山
四つの集団間での通婚が活発であったことを示唆している。

吉胡の墓地を構成する埋葬小群はいずれも、抜歯の4I系と2C系を含んでいる。では、埋葬小群は、集落の構成要素の何に対応するのか、それは世帯なのか、集落なのか、それとも氏族なのか。

ここで同じ東海地方、吉胡貝塚の西40kmに位置する静岡県浜松市蛸塚貝塚の縄文後期末～晩期初めの集落と墓地を参考にしよう。ここでは同時存在の住居は4棟ていどで、墓地は3小群から計35体見つかっている。これを吉胡貝塚にあてはめると、たとえば49体からなる中央小群は規模だけでいうと一つの集落に匹敵する。また、埋葬小群の数だけでいうと、吉胡貝塚の墓地は、二つていどの集落によって営まれていることになる。

次に吉胡貝塚の東北17.5kmに所在する小坂井町稲荷山貝塚の縄文晩期中頃の墓地をみよう(図14)。確認された埋葬小群は、吉胡墓地のあり方を基準にすると2つあり、それぞれ16体、21体で4I系と2C系が組み合わさって構成されている。これが1集落に伴う墓地の一部と考えるならば、埋葬小群はその規模からすると世帯に対応すると理解するのが妥当のようにみえる。

しかし、伊川津貝塚の再葬墓の分析から帰葬の風習があった

ことを認めるならば、帰葬された遺体を埋葬する場所は父親または母親とその子供つまり自分の兄弟姉妹からなる墓群のなかしかない。すなわち、埋葬小群は婚入者である妻または夫を除く血縁者⁽¹⁷⁾と他集落に婚出した人の帰葬者から成る血縁集団によつてのこされたことになる。

吉胡貝塚出土の土器は、縄文後期末の吉胡 K1 式（前 1400 年前）から弥生前期末の水神平式（前 400 年前）までの約 1000 年間にわたっている。その間、居住も墓地も連綿とつづいたとしよう。吉胡貝塚からこれまでに発掘された成人骨の数は 250 体でいどである。この数を問題にするのに、18～19 世紀の家系の 1 例⁽¹⁷⁾を参考⁽¹⁷⁾にすると、当主の一家族のばあい 100 年間に死亡した成人の数は平均 10 人であつて、その間に当主は 3 回交代している。そうすると、仮に 3 家族の家系が 1000 年間つづくと、死亡した成人の数は約 300 人、縄文人のばあいは平均寿命を考慮すれば、350～400 人に達する。吉胡貝塚の存続期間からすると、これまでに見つかった成人骨 250 体余は、3 家族でいどがのこした遺体数とみてもけつして多すぎることはなく、必ずしも大きな集落を想定しなくてもよいことになる。

さらにいえば、各埋葬小群には抜歯の 4I 系も 2C 系も含んでいるので、たとえば氏族ごとの墓地と考えることはできない。中国地方の縄文時代の墓地を分析した山田康弘は、岡山県笠岡市津雲貝塚の埋葬小群を 2, 3 棟からなる集落にあて、津雲墓地をいくつかの集落の共同墓地と解釈している [山田 2008b]。吉胡墓地の構成については、いずれ実現するであろう全人骨の年代測定の結果をまけて再考することにした。

(3) 吉胡集団と伊川津集団の関係

松村博文は、吉胡、伊川津、保美、稲荷山の 4 貝塚から発掘された人骨の歯冠計測値を Q モード相関係数にもとづいて個体間の類似度を求める作業をおこなっている (図 15) [松村 2000]。松村が分析した人骨の数は合計 70 体、内訳は吉胡 26 体、伊川津 19 体、保美 10 体、稲荷山 12 体である。その結果を参考にして吉胡と他の集落との関係について考えてみよう。

これらの 4 貝塚の人骨は、歯冠計測値によると、小さくみると 8 群、大きくみると 4 群に分かれ、4 貝塚の人骨は、それぞれの小さな群のなかにいずれも含まれている。保美貝塚と稲荷山貝塚の人骨の分析例が増加すれば、おそらくすべての群に 4 貝塚の人骨が含まれると予想してよいだろう。

ところが、これらのなかに岡山県津雲貝塚のデータをいれると、東三河の集団と無秩序に類似している。松村によると、同一遺跡の 2, 3 例の個体がまとまりを形成しているものについては偶然の空似にすぎないというおそれがあるが、4, 5 例以上の個体が密接に結びつくまとまりについては、血縁が含まれている可能性が十分考えられるという。その例として松村があげているもので抜歯型式のわかる例がある (表 5)。

これによれば、稲荷山の 2C 型同士、吉胡の 4I2C 型同士、吉胡の 4I 型と 2C2I 型とのあいだに血縁関係が存在し、血縁関係は抜歯型式とは直接的な関係がないことを示している⁽¹⁸⁾。2C 型同士の例は、伊川津 8406 号墓のばあいと同じである。注目すべきは吉胡の 2 例目のなかに伊川津 8406-1 号の抜歯の 2C 型をふくんでいることである。この例は、吉胡の出身者が伊川津に入ったか、または伊川津の人が吉胡に出て死亡後に伊川津に帰葬された可能性があるとの推定を導く。

ここにあげた吉胡の人骨が、さきに群別した吉胡墓地の小群のどれに属しているかをみると、1

表5 歯冠計測値にもとづいて類似が認められた人骨の性・抜歯型式

- 例1 吉胡西a小群:45号男(壮年, ?型)―西b小群:61号女(熟年, 2C2I型)―東a小群:104号男(熟年, ?型, L2式腰飾り)―東b小群:249号男(熟年, 4I型, L2式腰飾り)―東c小群:199号男(熟年, ?型)
- 例2 吉胡西b小群:62号女(熟年, 4I2C型)―東a小群:143号男(熟年, 無抜歯, Wb式腰飾り), 158号男(熟年, 4I2C型), 183号男(熟年, 4I2C型)―南a小群:203号女(熟年, 4I2C型, Y1式腰飾り)―伊川津8406-1号女(熟年, 2C型)
- 例3 稲荷山2203号?(若年, 2C型), 稲荷山2224号男(壮年, 2C型), 稲荷山2225号男(壮年, 2C型), 稲荷山2227号男(壮年, 2C型)

は、西b小群―西a小群―東a小群―東b小群―東c小群が結びつき、2は、西b小群―東a小群―南a小群―伊川津が結びついている。3は、稲荷山墓地の中で完結しており、外部との関係は確認できない。

すなわち、歯冠計測値の分析結果を尊重すれば、吉胡墓地の各群の一部の構成員同士に血縁関係を認めることができる。そして、吉胡のそれぞれの小群は一定の連続的な結びつきをもっている可能性を示唆している。吉胡61号女性2C2I型と同249号男性4I型が血縁関係にあるというのは、吉胡61号女性が吉胡出身で死後に例えば伊川津から帰葬されたと考えられることもできるし、吉胡249号男性は吉胡61号女性の子ともであるとしても説明はつくだろう。

⑥……………縄文晩期東三河の社会構成

(1) 吉胡集団の氏族

吉胡貝塚の埋葬小群からなる墓地のあり方、L、Y、V、Jの主要4型式からなる腰飾りの存在とその分布状態をみてきた。では、吉胡に墓地をのこした人びとはどのような社会構成をもっていたのであろうか。

文化人類学では、リネージは「明確に認識されている祖先と子孫との系譜関係にもとづいて認識されている共通の祖先からたどられる出自を同じくしている人びとの集団」と定義する一方、氏族は「神話・伝説上仮定された始祖からたどられる共通の出自によって組織された社会集団である。しかし、明確に認識された系譜をたどることはできず、神話的認識や伝説上の標章・トーテムなどの象徴物にもとづいて、相互に同一の成員であることを認識している集団」と定義している〔渡邊1987:330-331, 819〕。リネージも氏族も、父系または母系の単系的出自集団であり外婚制をとまなう集団という点は共通する。

縄文晩期の東三河の腰飾りの多くは、特別に装飾性に富んでいるというわけではない。しかし、これ以外の装身具は鹿角製の耳飾りが少数、貝輪が存在するていどであるから、装身具のなかではもっとも重要な位置を占めていたことはまちがいないだろう。腰飾りは全体によく磨滅し、紐孔が欠損すると、近くにあげ直している(吉胡103号, 同106号, 伊川津2206号, 同8401号例)。吉胡貝

塚の人骨に伴ったL型式の腰飾り13点のうち3点は下端の環状部が欠損した状態で出土している。一部が欠損しても使用をつづけたのは、標章という性格をつよくもっていたからであろう。腰飾りをつけた男性が、猿の橈骨製耳飾りなど他の装身具もつけている例はあるけれども、一般的ではない〔春成2010〕。吉胡貝塚の腰飾りは成人約250人のうち26人が着装、1集落の人口を成人・未成人あわせて計20人とみれば、腰飾りをつけた男性は吉胡墓地を構成する集団に1人か2人いたにすぎない。腰飾りにはL、Y、V、Jの主要4型式が併存する。そこで、腰飾りは氏族の長が着ける標章であったと考え、仮称L氏族、Y氏族、V氏族、J氏族の長の存在を想定することにしよう。

吉胡貝塚から見つかった腰飾りはL型式が13点、Y型式が5点、V型式が4点、J型式が2点である。これを、各氏族の長はつねに1人として、13代分のL氏族長、5代分のY氏族長、4代分のV氏族長、2代分のJ氏族長が身に着けていたと仮定しよう。そうすると、L型式がV型式、Y型式、J型式にくらべると圧倒的に多いこと、L1式を2点含んでいる一方、V型式はL1式よりも年代がくだるとみてよいことから、吉胡集団はL氏族を中心にして始まったと考えることができる。

そして、吉胡墓地では、中央小群からL1式1点、L3式2点、Y1式1点、J2式1点が出土し、東a小群からL1式、L2式、L3式のほかにY1式とV3式の腰飾りを出土する一方、南a小群にはY1式2点にL2式1点を伴い、南b小群にはV3式2点にL3式1点を伴っている。これらの事実を、L氏族とY氏族やV氏族との系譜的な関係をあらわす証拠と考えよう。西a小群と東a小群を主としてL氏族、南b小群をL氏族の一部から独立したV氏族、南a小群もL氏族から独立したY氏族の墓群と推定する。伊川津などの他集団にいたY氏族やV氏族の人たちの遺体を帰葬したときの埋葬位置が、Y氏族やV氏族の埋葬小群だけでなくL氏族の埋葬小群にもなったのは、彼らがL氏族から分岐した経緯を示唆しているのであろう。では、Y氏族やV氏族の長も、吉胡集落に住んでいたのだろうか、それとも他集落に住んでおり、死後に吉胡の墓地に埋葬されたのだろうか、大きな問題である。

東a小群出土の腰飾りには、少数ではあるがさらにJ型式やC型式が存在する。J型式を保美集団に中心をおくJ氏族の長が身に着けていた腰飾りと想定すれば、吉胡の墓地には、L、Y、Vの氏族以外の氏族長とその構成員も混じっていることになる。仮にL型式の腰飾りをつけた人が氏族長を務めた期間を1人平均20年間とすれば13代にわたるL氏族の存続期間は約230年間のことになり、1人平均30年間とすれば約390年間のことになる。吉胡の発掘は完了していないことから判断すると、L型式の腰飾りの数はより多く、したがってL氏族の存続期間がさらに延びることは確かである。

(2) 氏族長と叉状研歯者の性格

吉胡の墓地で最古と推定するL1式の腰飾りの持ち主は吉胡106号人骨で、それにつづくのは吉胡85号人骨である。そして、吉胡85号人骨の生前はL型式の腰飾りを着け、叉状研歯を施した男性であった。しかし、1人で腰飾りと叉状研歯の組み合わせをもつ人は他には吉胡120号人骨が存在するだけである。その後の動向をみるならば、彼はL氏族長と、叉状研歯を施した人の任務の両方に就いていた。氏族長と叉状研歯の人物が分化したのは、彼が亡くなった後のことであっただろう。しかし、その後も何らかの事情で120号人骨のように両方を兼ねる人が稀に存在した。

吉胡集団の主体になっている氏族長は男性で、稀には92号のように、女性が務めることもあったけれども、それは例外であった。

L氏族長が吉胡に住んでいたことを認めると、L型式の腰飾りが伊川津からも2点見つかっており、うち1点は4I系抜歯の人がつけていた事実は、L氏族の長がつねに吉胡にいたのではないことを意味しているのだろうか。それとも、伊川津でL型式の腰飾りをつけた人は、吉胡のL氏族から分岐して伊川津にいたL'氏族の長であったのだろうか。逆に、吉胡に埋葬されたY型式やV型式の腰飾りをつけた遺体が、2C系抜歯を施している事実は、Y氏族やV氏族の長が吉胡出身者で他集落で最期を迎えたあと、出身集団の吉胡に帰葬されたと考えるべきであろうか。

腰飾りの着装者は、熟年(40～59歳)で死亡した例が多い。しかし、壮年(20～39歳)で亡くなった者もいるし、本刈谷0305号のように16歳頃に亡くなった例も存在するから、その地位に就いたのは若年～壮年のときであった。氏族長になる条件は、「長老」のような「経験と能力」を十分にもつ者ではなかった証拠である。同時に彼を補佐する年長者が存在したことを示唆する。各氏族の長は、氏族の過去と現在を結ぶ血縁性の象徴であり、対外的には氏族を代表し率いる指導者であったのだろう。

しかし、氏族長といっても、その任務を果たしたことによって死後、墓の構造や副葬品などの点において特別に丁重に埋葬された痕跡をのこすことはなかった。氏族長がもっていた権威は死亡と同時に消えてしまうていどのものであった。

又状研歯は、歯の変形加工に対する特別な意識の存在を感じさせる点で抜歯と共通する。又状研歯は、祖先祭祀を司り、抜歯などの儀礼を執行し、おそらくそれを統括する人物の標章であった、と筆者は考える。又状研歯者が男女同数見ついているのは、その儀礼を男女別々におこなったか、それとも男女ともに参加する祭祀儀礼が存在したか、どちらかであろう。伊川津2222号人骨(女性)、同3744号人骨(男性)や枯木宮7209号人骨(女性)は、若年のうちに又状研歯を施し、その後、あまり歳月を経ないうちに死亡した人物である。又状研歯者の任につくのは、早ければ10代の終わりころであったらしいので、若くても可能であったのである。彼ら彼女らにもまたおそらく経験豊かな年長者の補佐役がついていたのであろう。氏族長は又状研歯者が兼ねることも稀にあったけれども、通常は別の人が担当した。又状研歯者は吉胡の墓地の中央小群に集中しているように、特別な家系の男女であったろうが、彼らもまた、死後、特別にいいに埋葬されることはなかった。

(3) 4I系・2C系の二グループ

伊川津貝塚や保美貝塚の再葬墓や盤状集骨墓で2C系抜歯の人同士で血縁関係が認められる事実から、2C系の人たちは死後に婚出先の集団から出身集団に帰葬されたことを想定した⁽¹⁹⁾。2C系の人たちの帰葬はごく普通であったとすれば、抜歯系列のうえでは4I系と2C系の対立的な関係がみられるけれども、吉胡貝塚の墓地に埋葬された4I系の人と2C系の人とはどちらも吉胡出身者で相互に血縁関係があったことになる。

縄文後期末～晩期初めに東海地方西部に4I・2C系の抜歯、又状研歯、腰飾りが出現する。それは、人びとが吉胡や伊川津に本格的に生活拠点を置いて集団関係を新たに築いた時期であった。伊川津や保美などの多人数集骨墓や吉胡の盤状集骨墓は、新しい集落と墓地を開基するさいに、それ以前

の集落・墓地に埋葬してあった遺体を掘り出して再葬したもので、その場所つまり施設は始祖たちの記念物の意味をもっていたのであろう。そう考えると、少なくとも2C系の抜歯は吉胡や伊川津の集落が成立する以前に成立していたことになる。

4I・2C系の抜歯型式は東海西部から九州南部まで広域に分布している。⁽²⁰⁾ 宮滝式土器—福田KⅢ式—御領式の黒色磨研・凹線文を特徴とする広域土器型式の成立を基盤にして広がったことはまちがいないだろうが、4I・2C系の抜歯型式が成立した厳密な時期は確定できていない。吉胡貝塚の

表6 縄文時代後期後葉～晩期の編年表（[長田2011]を設案博己の意見をいれて改変）

¹⁴ CcalBC	地域		近畿	尾張・西三河	東三河	関東	東北
	時期						
1450	後期	後葉	宮滝Ⅱ	馬見塚K1	吉胡K1	安行1	瘤付Ⅱ
1350			滋賀里Ⅰ	寺津下層	伊川津Ⅰ	安行2(古)	瘤付Ⅲ
			滋賀里Ⅰ～Ⅱ	(+)	(+)	安行2(新)	瘤付Ⅳ
1270	晩期	前葉	滋賀里Ⅱ	下別所	伊川津Ⅱ	安行3a(古)	大洞B1
1170			滋賀里Ⅲa	寺津	吉胡BⅡ	安行3a(新)	大洞B2
1100				雷Ⅱ(古)	保美Ⅱ(古)	安行3b(古)	大洞BC1
1000			篠原(古)				
			篠原(中)	雷Ⅱ(新)	保美Ⅱ(新)	安行3b(新)	大洞BC2
900		中葉	篠原(新)	元刈谷・桜井	稲荷山	安行3c	大洞C1
780		滋賀里Ⅳ		西之山	安行3d	大洞C2	
600	弥生前期	後葉	口酒井・船橋			千網	大洞A1
500			長原		馬見塚	千網	大洞A2
400					檜王	荒海1・2	大洞A'

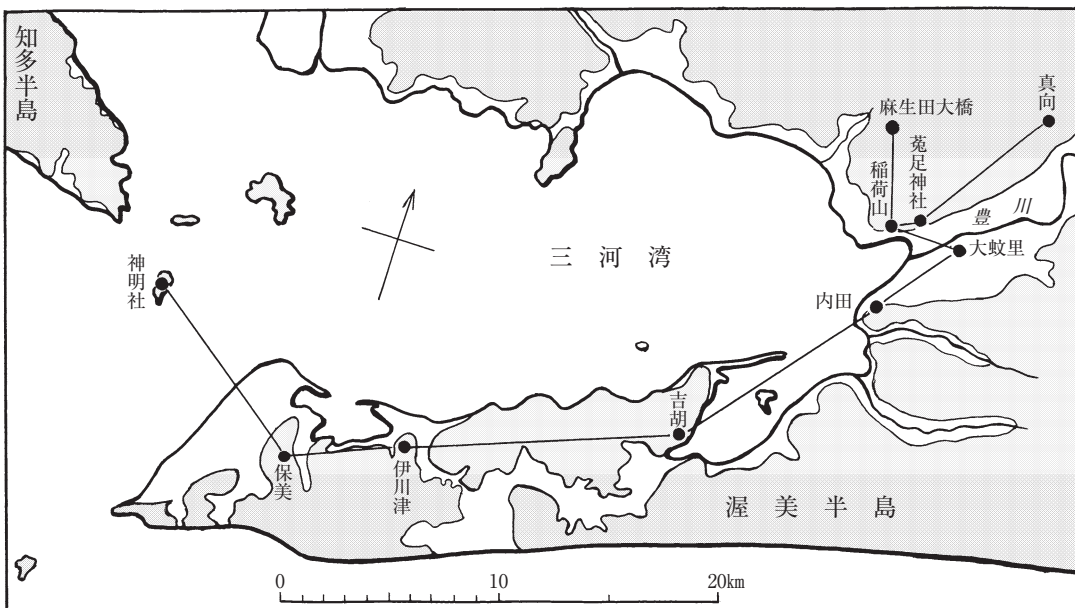


図16 渥美半島から豊川流域の縄文晩期の遺跡分布

約5km間隔で分布しているが、伊川津と吉胡の間は約12kmあいている。規模の大きな遺跡は、保美、伊川津、吉胡、大蚊里、稲荷山、麻生田大橋である。

埋葬人骨の年代の上限もまた不明である。吉胡貝塚の最古の貝層は、吉胡下層式あるいは伊川津Ⅰ式土器の時期であるが、まとまって土器が出土するのはもう一時期古い吉胡Ⅰ式=宮滝式からである。おそらく後期後半に、吉胡・伊川津両貝塚の集落は本格的に始まり、渥美半島から豊川流域の集団領域にかかわる権益関係を新たに設定し、出自関係も整理したのであろう。そして、晩期初め頃に成人・婚姻の儀礼、帰属集団とかわる抜歯の4Ⅰ・2Ⅱ系を生みだし、それを厳格に管理・執行する又状研歯者も出現した。吉胡貝塚で、最初に又状研歯者と腰飾りの着装者が一致していたのは、L氏族の長の任務と抜歯儀礼の執行が本質において一つのことであったからなのであろう。

縄文晩期初めの東三河の土器型式(伊川津Ⅱ式・吉胡BⅠ式)は、西三河から尾張にかけて分布する土器型式(下別所式・寺津式)と区別される(表6) [増子2008]。東三河の縄文晩期の遺跡の分布状況から、吉胡貝塚や伊川津貝塚の集団は、渥美半島から豊川流域に所在する諸遺跡をのこした10~15集団でいど一つの部族を構成していたと考えることができる(図16)。1集団の人口を平均20人とすれば、1部族の人口は、多くても300人を大きく超えることはなく、西三河そして尾張の部族のばあいも、同様であったろう。このように理解するならば、吉胡、伊川津、保美(以上、田原市)、稲荷山、菟足神社、麻生田大橋(以上、豊川市)、大蚊里、内田(以上、豊橋市)、真向(新城市)の⁽²¹⁾集団は一つの通婚圏のなかに含まれていたから、たとえば吉胡集団と伊川津集団との間でも、4Ⅰ系、2Ⅱ系のどちらの抜歯系列に属していたとしても、4Ⅰ系同士、2Ⅱ系同士、4Ⅰ系と2Ⅱ系との間で血縁関係をもつ人が少なくなかったであろう。

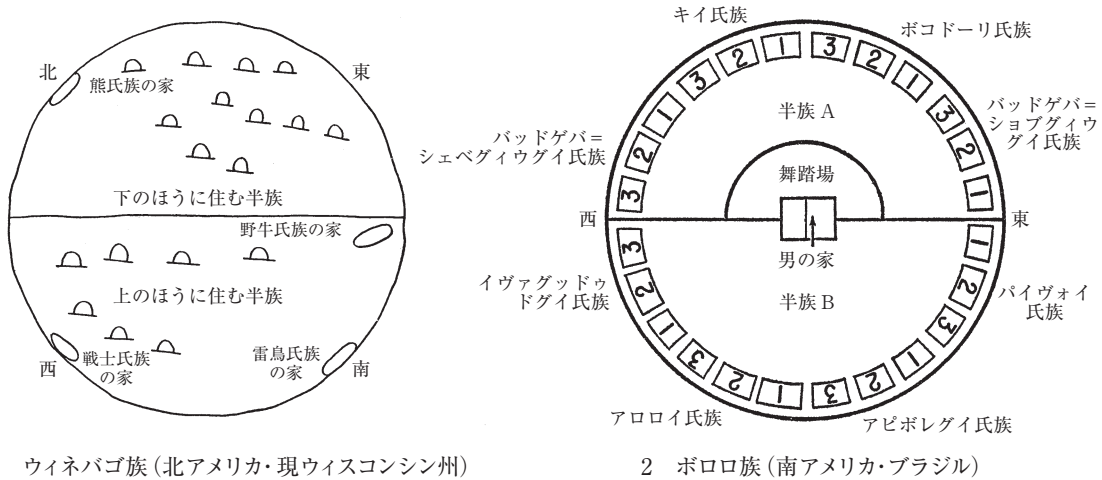
さきに、腰飾りのあり方から抜歯の4Ⅰ系がL氏族、2Ⅱ系がV氏族とY氏族を含むような社会構成の存在を推定した。では、4Ⅰ系と2Ⅱ系の区分は何を表示しているのだろうか。吉胡、伊川津の2貝塚では4Ⅰ系で腰飾りを伴う人は13例に対して2Ⅱ系で腰飾りを伴う人は6例である。又状研歯の人も4Ⅰ系に一方的に偏っている。再葬や移葬、盤状集積の対象になったのはもっぱら2Ⅱ系の人であった。骨化した遺体の移動を想定するならば、2Ⅱ系の人たちの少なくとも一部は二重の埋葬を必要としたことになる。4Ⅰ系と2Ⅱ系は対等・平等の関係とはいえない。2Ⅱ系の人々は死後に帰葬されたとするならば、もっぱら2Ⅱ系の人すなわちY氏族やV氏族の人たちだけが婚後に居住集団を変えていたことになる。では、これらの事象から、どのような社会組織を復元できるのであろうか。

(4) 双分組織の民族例

C. レヴィ=ストロースは、北アメリカのウィネバゴ族と南アメリカのボロロ族の双分組織をもつ集落の民族例を使って「双分組織は実在するか」について論じている [レヴィ=ストロース(生松訳)1972]。P. ラディンが現地の先住民に描いてもらったウィネバゴ族の集落の平面図と、アルピゼッティ神父とレヴィ=ストロースがそれぞれ作成したボロロ族の集落の平面図では、環状集落が半族によって直接的に二分される一方、それぞれは氏族によっていくつかに分節されている(図17)。

半族とは、部族や村落が明確な機能をもつ2集団に分かれているばあいの二分された各々の集団をさす。双分組織が、もっとも顕著な形をとるのは、各半族が外婚単位を構成し、二つの集団間で対称的な交換婚をおこなっている場合である [笠原1987]。

南アメリカ・ブラジルのボロロ族のケジャラ村についてみよう [レヴィ=ストロース(川田訳)]



1 ウィネバゴ族(北アメリカ・現ウィスコンシン州)

2 ボロロ族(南アメリカ・ブラジル)

図17 双分組織をもつ社会の集落平面図 [Radin 1923, レヴィ=ストロース1972]

ウィネバゴ族の図は「天にいる者たちの半族」の情報提供者が描いたもの。雷鳥氏族の長は部族の長を兼ねており、身分はもっとも高い。ボロロ族では村人が死亡すると中央の広場に穴を掘って仮埋葬し、骨化すると湖か川の底に沈める。

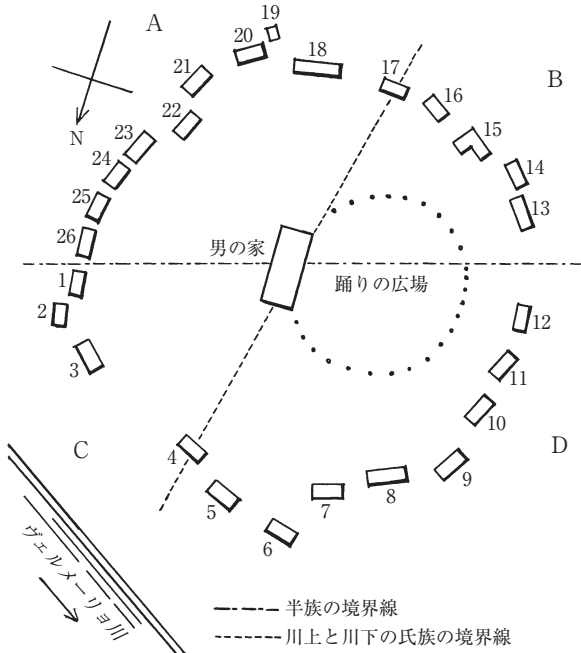


図18 南アメリカ・ボロロ族のケジャラ村の平面図 [レヴィ=ストロース(川田訳) 2001]
A,Cは川上, B,Dは川下にあたる。

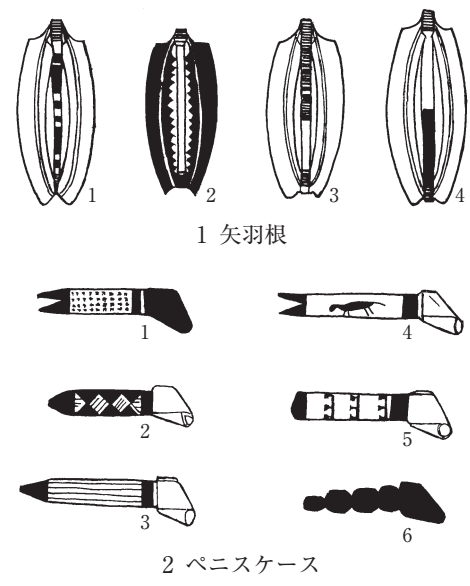


図19 南アメリカ・ボロロ族が器物にあらわした氏族の紋章 [レヴィ=ストロース(川田訳) 2001]

2001]。ケジャラ村の人口は約 150 人で、1 氏族 3 棟 1 組で計 26 棟の住居を径 94m × 102m の環状に配列し、中央に 9m × 21m の建物 (バイtemanナゲオ) をもっている (図 18)。この長大建物は「男の家」で、作業場、クラブ、独身男性の宿舎、さらに女性抜ききの宗教儀礼の場でもあった。この建物の西側に接して杭で囲まれた径 26m の円形の空間は、公けの儀式をおこなう「踊りの広場」であった。ボロロ族は、母系制で妻方居住婚の制度をもつ社会である。女は自分の生まれた家に住み、そ

れを相続した。男は反対側の半族で生まれたので、婚入先の住居での居心地はよくなかったという。夫婦は26棟の住居に分かれて住んでいた。約150人の村人が26棟+1棟に分かれて住むとなると、周辺の1棟に平均5人、男の家に20人ほどが起居していたことになろう。26棟の住居はさらに3棟1組で1氏族が住んでいたが、そこには上中下の序列があった。村は、直径を東西方向に二分され、北はチュラ半族（「弱い者」）、南はテュガレ半族（「強い者」）となる。さらに、すぐ近くを流れるヴェルメーリョ川を基準にして直径を南北方向に二分され、川上の氏族（A、C）と川下の氏族（B、D）とに分けている。この東西南北の分割線によって四分された村のなかには、A→C→B→Dの序列が与えられていた。したがって、ケジャラ村を構成する26棟の住居の住民には1番から26番までの序列があったわけである。

ボロロ族では、弓、矢羽根、陰莖鞘（ペニス・ケース）などは、持ち主の氏族がわかるよう形態・文様の区別があり、氏族の「紋章」として区別と差別の機能をはたしていた（図19）。

ボロロ族の墓制は再葬であった。村人は死亡すると、村の中央に掘った穴のなかに安置して肉が腐るまでおき、そのあと骨を洗って色を塗り、羽根を色とりどりに貼り付けた後、籠に入れて湖か川の底に沈める。したがって、ボロロ族には私たちが考えるような墓地は存在しない。

ボロロ族では、このように男の家の周りに住居を環状に配列することは、社会生活や儀礼の執行にとってきわめて重要で、環状の村は社会組織と宗教組織を明らかに図式的にあらわしていた。

つぎに、L.H. モーガンとP. ラディンの報告した古典的に知られている北アメリカ先住民の半族の例をみよう（表7）。モーガンによると、セネカ部族の半族（モーガンの用語では胞族 *phratria*）に含まれる諸氏族は、元々は熊氏族と鹿氏族の一つずつであったが、成員数の増加によって分化をくりかえした結果、いくつもの数になった。そして、半族の成員数が不均衡になると、一部の氏族は半族を変えた。あるいは、成員数の増加にともない、成員が地域的に分離し、それにもなって一氏族の分割がおり、分割した部分が新しい氏族名を名乗った、という〔モーガン（古代社会研究会訳）1990〕。

ラディンによると、ウィネバゴ部族は「天にいる者たちの半族」（ラディンの表現では *Wangeregi* = Upper *phratry*）の4氏族（雷鳥、鷹、鷺、鳩）と、「地にいる者たちの半族」（*Manegi* = Lower *phratry*）の8氏族（熊、狼、野牛、水霊、鹿、大鹿、蛇、魚）からなり、「天にいる者たちの半族」の出身者は「地にいる者たちの半族」の出身者と結婚し、それぞれは外婚半族である⁽²²⁾。半族を構成する氏族の数は、「地にいる者たちの半族」は「天にいる者たちの半族」の2倍で、分族が進んでいる。計12氏族のうち雷鳥氏族はもっとも優位を占めており、二つの半族を統合する部族の長はそのうちから選ばれ、彼の住居は一般の住居とは外見を異にしている。雷鳥氏族の長は平和にかかわる諸機能をもつものに対して、熊氏族の長は戦争にかかわる諸機能をもっている。ウィネバゴ部族のすべての氏族は各集落に分散して居住しているから、どの集落においても氏族および半族による組織が存在した〔Radin 1923〕。

では、墓地の形態はどうか。モーガンの記述によって古くから知られる北アメリカのルーイストン付近（現、ノースカロライナ州）のタスカローラ族の墓地では、部族が1共同墓地を有し、同一氏族の個人は彼らだけ1列に埋葬されている。1列はビーヴァー氏族の死者の墓からなり、2列は熊氏族の死者、また1列は灰色狼氏族、1列は大海亀氏族というように8列にまで及んでいる。夫と

表7 北アメリカ先住民の双分・三分組織の構成 (L. H. モーガン, P. ラディンによる)

セネカ部族	
第1半族	熊, 狼, ビーバー, 海亀の4氏族
第2半族	鹿, シギ, 鷲, 鷹の4氏族
チッカサ部族	
豹半族	山猫, 鳥, 魚, 鹿の4氏族
スペイン半族	アライグマ, スパニッシュ, ロイヤル, ハッシコーニ, リス, ワニ, 狼, 黒鳥の8氏族
モヒーガン部族 (三分組織)	
狼族	狼, 熊, 犬, フクロネズミの4氏族
海亀族	小海亀, 泥海亀, 大海亀, 黄色ウナギの4氏族
七面鳥族	七面鳥, 鶴, 雛鳥の3氏族
トリンギット部族	
狼半族	熊, 鷲, イルカ, フカ, ウミズメの5氏族
ワタリガラス半族	蛙, ガチョウ, トド, フクロウ, 鮭の5氏族
ウイネバゴ部族	
天にいる者たちの半族	雷鳥, 鷹, 鷲, 鳩の4氏族
地にいる者たちの半族	熊, 狼, 野牛, 水霊, 鹿, 大鹿, 蛇, 魚の8氏族

妻は死後は別れ、異なった列に埋葬されていて、父とその子もこれと同様である。しかし母とその子および兄弟姉妹は同じ列に埋葬されている [モルガン (青山訳) 1958 : 121]。

すなわち、ある氏族への帰属が生誕時に決まるとその族籍は結婚後も死後も変わることがなく、墓地での埋葬位置まで決まっている。彼らは生きていたときは、いずれかの氏族の家屋内で夫と妻は子どもたちと世帯単位で家族生活を営んでいたが、世帯単位で埋葬列や埋葬群をつくることはな⁽²³⁾かった。

以上にみてきたように、双分組織のばあいでも、半族間でも氏族間でもつねに平等の関係を保っているわけではない。ラディンの報告と、自ら調査したボロロ族の調査結果を分析したレヴィ＝ストロースは、「双分組織のごとく均斉のとれた(少なくとも外見上は)タイプの社会構造においてさえ、半族と半族との関係は決してそう考えられがちであるほどに静的でも相互的でもない」と述べている [レヴィ＝ストロース (生松訳) 1972 : 149 ~ 151]。さらには、半族を構成する氏族間そして氏族内においても上中下の関係が厳然として存在した。部族長や氏族長が存在すれば、その地位をあらわす標章すなわち装身具を彼らが身に帯びていたことは容易に想像がたつだろう。

(5) 縄文社会と双分組織

中部・関東地方の縄文中～晩期の集落が相対する二群の住居群から成りたっている例が多いことに着目した小林達雄は、墓地においても同様の傾向を認めることができた。さらに、住居にも富山県不動堂遺跡の大型建物(長径17m, 短径8mの楕円形)の長軸中央に一線に並ぶ4基の石組み炉が東側の2基は長方形, 西側の2基は円形であった事実から「二つの集団」の存在を想定した。

そして、抜歯の二系列もまた一集団内に「出自とか出身」にもとづく「二派が同居していた可能性」があるとして、北アメリカ北西海岸先住民のトリンギット族の村に二つのフラトリー（胞族）が共住する例をあげ、縄文時代に「主体性の高い」「二者の対立と合一性」をもつ「双分制」が存在したことを説いている [小林1993]。

その後、関東・東北地方の縄文中・後期の環状集落に伴う墓地にみられる2大群4小群（東京都多摩ニュータウンNo.107遺跡など）や2大群8小群（岩手県西田遺跡）（図20-1・2）を分析した谷口康浩は、レヴィ＝ストロースや大林太良の論 [大林1971：55～64] を参考にして、2大群を半族、小群をリネージの反映と解釈している [谷口2005：90～116]。

縄文時代の環状集落の構造に双分組織を看とるには、墓地の2大群内の男女の割合についての人骨情報がほしいところである。千葉県市川市姥山貝塚M地点の墓地では、縄文後期中頃（加曾利B式）の伸葬した遺体の頭位方向により42体からなる埋葬群が中央で東西にきれいに分かれる。東群は男7体、女7体、子ども1体に対して、西群は男4体、女9体、子ども3体からなりたっている。抜歯は、東群が左側の側切歯または犬歯を抜いたL型が男2体、女3体、右側を抜いたR型が男1体、左右とも抜いたLR型が男1体に対して、西群はR型が男2体、RC型が男1体、女3体である（図21） [春成2004：496～498]。形質人類学の方法を用いた分析がなされていないので資料的には不十分であるが、遺体配置の対称性は双分組織の存在を示唆している。

集落の環状構成は関東地方では後期後葉に崩れるが、そのような集落構造が東海地方に存在しなかったのかという点は、究明されていない。では、縄文晩期の抜歯の二系列を環状集落の二分と同じ意味にとり、双分組織の反映とみてよいだろうか。

筆者は当初、4I型と2C型の抜歯は婚姻儀礼時に施し、4I型は他氏族からの婚入者、2C型は自氏族を表示すると考えた [春成1973：32]。しかし、その後、腰飾りの着装者、又状研歯者が4I系と2C系との間で格差が大きすぎることを理由に、4I系をその土地の出身者、2C系を他集団からの婚入者と理解し、氏族の存在は証明できていないことを述べてきた。装身具を「富と威信の象徴」とみて、その着装者を集団内の有力者とみなす通説に従い、また又状研歯者を「特殊階級ないし種

表8 抜歯系列の男女別例数

抜歯系列	性	津雲		保美		伊川津		吉胡		稲荷山	
4I系	男	9		5		15		26		10	
	女	24	33	11	18	15	36	33	59	16	26
	?			2		6					
2C系	男	23		12		20		23		10	
	女	12	35	7	21	14	38	38	61	2	12
	?			2		4					
計	男	32		17		35		59		20	
	女	36	68	18	39	29	74	61	120	18	38
	?			4		10					

*津雲は [宮本1925]、保美・伊川津は [舟橋2010]、吉胡は [清野・金高1929、中山1952]、稲荷山は [大倉1939] から算出。

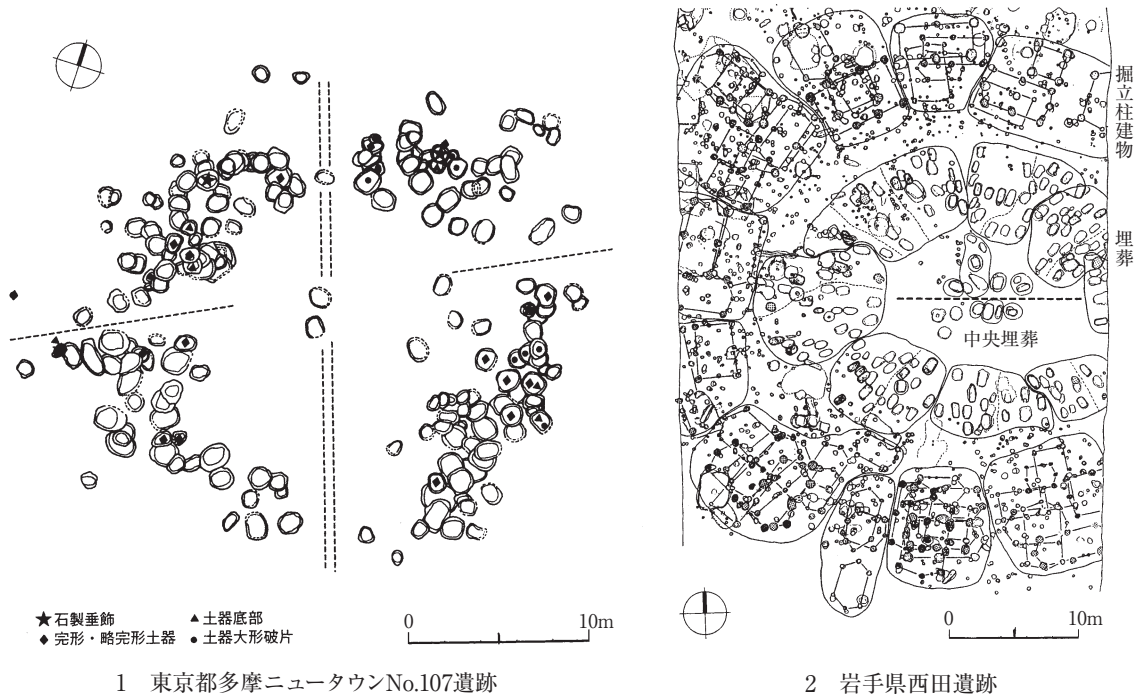


図20 縄文墓地の二大群と小群 [谷口2005]

多摩ニュータウン遺跡では二大群がそれぞれ二小群に分節, 西田遺跡では墓地は内帯と外帯に分かれ, 内帯の二列は対向, 外帯は8単位に分節している。

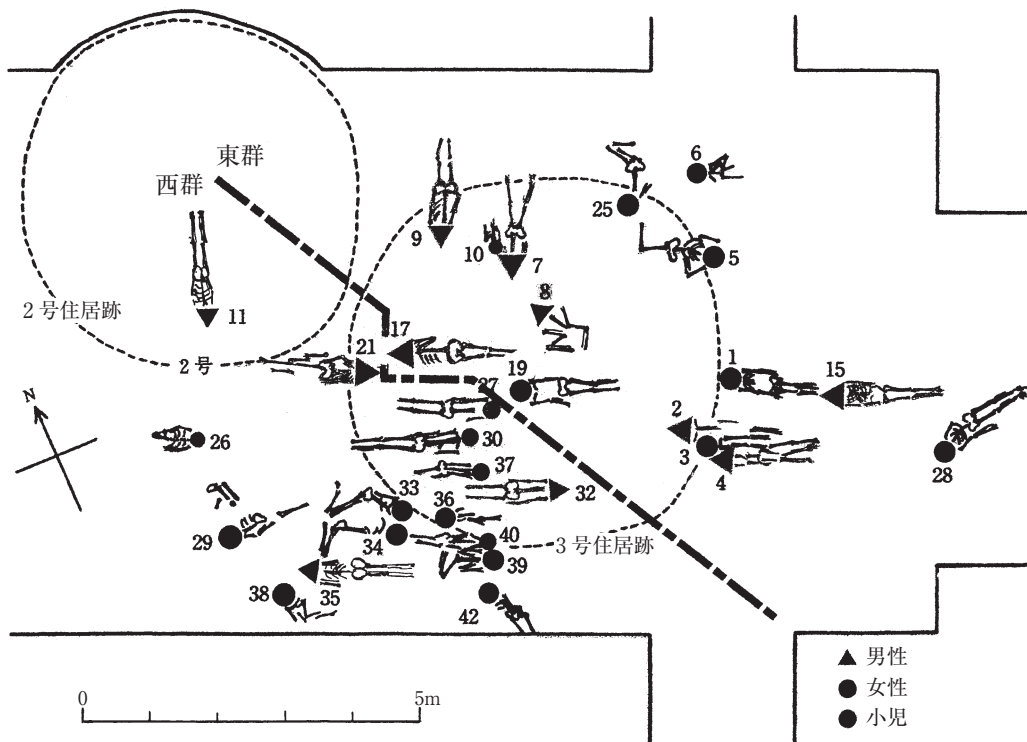


図21 千葉県姥山貝塚の加曽利B式期墓地の二分 [杉原・戸沢1971] から作成 [春成2004]

計42体からなる埋葬小群である。廃棄した3号住居を中心にして埋葬したようで, 遺体の頭位方向は中央できれいに反対方向を向いている。

族の有力者」とする鈴木尚〔鈴木1940：494〕や「集団の指導者」とする小林行雄〔小林1967：150〕の見解を参考にして、そこに見いだした不平等を血縁関係の有無にもとづく社会組織にあると考えた〔春成1979〕。

筆者が、抜歯の二系列を双分組織におきかえることをしなかったもっとも大きな理由は、吉胡貝塚では4I系と2C系の割合が1対1に近く、二系列ともそれぞれ男女の割合が近い一方、岡山県笠岡市津雲貝塚では、4I系と2C系の割合はほぼ1対1で、男女の割合は4I系が男9、女24に対して、2C系が男23、女12であったことである（表8）。そこで、居住集団＝集落に出自集団的な機能を与え、婚姻関係成立時に居住集団を変えない者は4I型、変える者は2C型の抜歯をおこなったと解釈した。そして、東海地方西部と中国地方東部の間で抜歯型式は同じでも、それぞれの男女の数にちがいが存在する点については、婚後の居住集団の選択に中国地方では妻方居住婚優勢で、東海地方西部では選択居住婚を採用していたと推定し、婚後の居住様式に地方差が存在すると理解した〔春成1979, 2002〕。

今回、筆者はL、Y、V型式等の腰飾りをそれぞれ氏族長の標章とみなし吉胡貝塚の墓地を分析した。その結果、4I系と2C系とは格差をもつグループ同士であり、さらに4I系グループにL氏族、2C系グループにY氏族とV氏族が含まれていることを認め、抜歯系列が示すグループと氏族は二重に外婚の単位として機能していた可能性があるとの考えに達した。すなわち、吉胡貝塚に埋葬されている集団は、4I系半族のL氏族の成員を中心に、吉胡集落や他集落に住んでいた2C系半族のY氏族やV氏族からの婚入者をふくむいくつかの世帯からなりたっていた親族集団である、という解釈である。そうすると、吉胡貝塚の墓地のばあい、埋葬小群は4I系と2C系のそれぞれ男女を含んでいるから、半族単位でも氏族単位でもなく、世帯単位で形成されていることになる。

その一方、伊川津貝塚では1922年から1984年間の発掘によって、4I系が36体（男15、女15、性不明6）、2C系が38体（男20、女14、性不明4）出土している。4I系と2C系の割合、そしてそれぞれの男女の割合は均等である。これらの遺体のうち4I系の34体と2C系の19体は墓地の西側から、2C系の19体は南側の埋葬小群から見つかっている。西側の発掘状況の詳細はよくわからないが、南側の状況から推定すると、伊川津遺跡では神明社付近を弧状に囲むように数棟の住居がたち、その西側に4I系の埋葬群、南側に2C系の埋葬群が多かったようである。4I系半族と2C系半族の墓域は截然と分かれていた可能性もあろう。

解決しておかなければならない問題は、同じ渥美半島に住んでいた保美集団のあり方である。保美貝塚では4I系は18体、2C系は21体で均等であるが、男女の割合は4I系が5：11で女が圧倒的に多く、2C系は12：7で男が多い。男女の数が半族間で偏るような構成をもつ双分組織が存在しうるのであろうか。保美の4I系グループを保美集団の出身者、2C系グループを他集団からの婚入者とすれば、保美貝塚と伊川津貝塚・吉胡貝塚とのちがいは、婚後の居住様式のちがいで済ませることができる。しかし、4I系半族と2C系半族からなる双分組織を想定するには、7kmたらずしか離れていない保美貝塚と伊川津貝塚の様相のちがいを、保美貝塚と同じ様相をもつ岡山県津雲貝塚まで含めて説明する必要がある。

双分組織のもとでは、ある個人がどちらの半族に帰属するかは、単系制社会であれば父系か母系かで決まるから、それは誕生時に決まっているとよい。抜歯の二系列を厳密にまもっている

東三河の社会でも、集団構成員の出自氏族や半族への帰属は同様であったろう。しかし、私たちが実際に認識しうるのは抜歯した結果が生じてからのことであるから、それは10代中頃以降のことになる。そして、それぞれの半族内での男女の割合は1対1になるのが自然である。問題は双系組織をもつ社会のばあいであって、父系をとるか母系をとるかの選択時に4I系には女を多く、2C系には男を多くするような規定を設けるならば、それぞれの半族内で男女の割合がそれぞれ一方に偏ったとしても通婚関係を維持することは可能であろう。保美貝塚や津雲貝塚のばあいも、抜歯の4I系と2C系がそれぞれ女<男、男>女の均衡がとれているかぎりは、双分組織は成立しうる。津雲、保美貝塚の延長線上に伊川津、吉胡貝塚をおくことができるとすれば、少なくとも中国地方から東海地方西部の範囲内では4I系と2C系の抜歯系列の背後に双分組織が存在し、それは腰飾りや叉状研歯のあり方から4I系を上位、2C系を下位とする上下の関係を内包するものであったと理解しておきたい。

東海地方西部、東三河の縄文晩期には、内部にいくつかの氏族を含む4I系半族と2C系半族からなる双分組織が存在し、全体としては部族として統合され、婚姻交換、各種物資の流通、祖先祭祀などをおこなって、その機構を維持しており、吉胡集団に発祥するL氏族はその中心に位置していた。このように考えるならば、東三河では縄文後期末／晩期初めに成立した4I・2C系抜歯は、人口の少なかった東海地方西部で円滑な通婚関係を維持するために採用した婚姻制度のあらわれであったのだろう。そして、弥生中期における4I系・2C系抜歯の消滅は、その制度がこの時期に衰退ないし解体したことを意味する。この時期には、4種類以上存在した腰飾りもまた消滅している。それは、4I系半族と2C系半族のそれぞれが少なくとも二つの氏族を内包し、氏族がしだいに外婚の単位として成長し独立していったことが双分組織にとっての桎梏となり、これまでの婚姻制度を解体に導いていったことを示しているのではないだろうか。

謝 辞

小論をまとめるにあたって、諸資料について教示いただき、あるいは資料調査の便宜をはかっていただいた安東康弘（笠岡市教育委員会）、岩瀬彰利（豊橋市中央図書館）、大塚達朗（南山大学人文学部）、岡田憲一・本村充保（奈良県立橿原考古学研究所）、川添和暁・永井宏幸（愛知県埋蔵文化財センター）、日下宗一郎（総合地球環境学研究所）、河野礼子（国立科学博物館）、設楽博己（東京大学文学部）、渋谷孝雄（山形県教育委員会）、諏訪元（東京大学総合研究博物館）、新美倫子（名古屋大学総合博物館）、橋本裕子（京都大学霊長類研究所研究員）、増山禎之（田原市教育委員会）、山田康弘（国立歴史民俗博物館）、国立民族学博物館図書室の諸氏に深謝する。

註

(1)——筆者は1981年5月28日、篠田惣次氏（長柄町史編集委員）の案内を得て、千葉県長生郡長柄町大津倉柳生谷（針ヶ谷の南西）と日の宮で江戸時代の男墓と女墓を調査した。柳生谷では両者は180m、日の宮では350m離れていた。市原市湿津村には、男女別墓地が3

箇所あり、それぞれの内部は男女別に分かれていた。

(2)——筆者が1973年に「抜歯の意義」、1979年に「縄文晩期の婚後居住規定」について発表したときに、興味を示し感想や意見を寄せられたのは、民族学の佐々木高明、大林太良、布村一夫、形質人類学の金関丈夫、古生

物理学・歯学の井尻正二、考古学の田中琢、都出比呂志、市原壽文、文献史学の藤間生大、明石一紀、関口裕子の諸氏であった。特に、佐々木、金関、関口の三氏はていねいな批評を手紙に書いてこられた。1970～80年代は、国立民族学博物館主催の5回にわたる「日本民族文化の源流の比較研究」シンポジウムもそうであるが、民族学主導で異なる学問分野の間で交流可能な状況が存在していた。このような学際的研究の最後の大型プロジェクトが2009～2012年度に国際日本文化研究センター主導の特定領域研究「日本および日本文化の起源に関する学際的研究」（領域代表者・尾本恵市）であった。筆者は考古班の代表を務めたけれども、研究成果を総括する論文集を刊行するまでに至らなかった。世代の交代が進み、全体の関心事が分散して足並みが揃わず、総合的学問を推進しようとする力が衰退していることを痛感した。

(3)——筆者はこれまで、15歳ころに上顎の左右犬歯を抜き、そのあと10代半ばから後半に下顎の左右犬歯または全切歯を抜いたと考え、上顎犬歯の抜歯を成人式にあて、4I・2C系抜歯を婚姻儀礼と結びつけて解釈してきた。上顎の抜歯が下顎の抜歯に先行すると理解したのは、大阪府国府1902号人骨では上顎の犬歯を抜いたあと下顎の犬歯を抜いてあるとする小金井良精の報告と、愛知県枯木宮A号とB号人骨で同様の例を見いだしたという服部又彦の報告、そして岡山県津雲貝塚、愛知県吉胡貝塚・保美貝塚に上顎の左右犬歯だけを抜いた例が存在する事実にもとづいていた〔春成2002:72〕。

ケニア中央部に住むチャムスの人々の間では、抜歯の習俗が20世紀までつづいていた。子どもは10歳くらいの年齢に達すると、親と同じ小屋に寝ることが禁じられるために、少年・少女は寝場所を求めて毎晩あちこちの家を渡り歩く。そして、夜の歌と踊りの会に集い、性関係をもつようになる。ただし、割礼前の少女の妊娠は禁忌であって、妊娠すれば墮胎あるいは嬰兒殺しの対象になる。少女たちは割礼前にすでに耳にイヤリング用の孔をあけ、下顎の切歯を1～2本抜いている。入社式の一環としておこなう割礼は男が15～23歳、女は14～17歳である。割礼は入社式の数々の儀礼を経た後におこなわれるので2年以上も先になる〔河合1994:168〕。一つの参考例である。

(4)——伊川津5910号は1959年に鈴木尚が発掘した35体のうちの1体でこれまでSZ210号と呼んできた人骨をさす。数字の最初の2は鈴木が主体になって発掘した2回目という意味であろうから、それは発掘年のなかに含まれるので省略する。正報告はなく、出土状態の写

真が公表されているだけである〔伊川津貝塚編集委員会編1972:図版67〕。20代後半～30代の男性で4I型抜歯は、2009年7月3日に河野礼子氏から教示を得た。伴出の腰飾りは所在不明である。図2に示した図は出土状態の写真から作成した。

(5)——中津6611号人骨は1966年1月28日に地元の西岡憲一郎が発見したもので、人骨は現在、新潟大学医学部収蔵。小片は中津11号人骨と呼んでいる。男性で上顎左右の犬歯のみ抜いており、下顎の抜歯はない。腰飾りは筆者が1981年5月に西岡から借用して調査、現在は倉敷考古館蔵となっている。西岡によると屈葬で、彼は「中津貝塚ノ内中津の畑 伴出土器 黒土B1 五号人骨（熟年男子）の腰飾 鹿角製」の付箋をつけていた。人骨の周辺から出土した土器はすべて微細片であるが、黒土B1式に属する口縁端内側が肥厚する浅鉢を含んでいる。しかし、墓坑を埋めた土の中に含まれていたのか、墓坑を掘りこんだ地層中に含まれていたのかの判断はできない。

(6)——吉胡貝塚の最近の調査では、平成の元号と土坑番号または発掘区名を使用して発掘年ごとに人骨に番号を付けているために、たとえばH16SZ01号となり、わかりにくく、覚えにくい。これまで筆者は、文化財保護委員会が1951年に発掘した1号人骨をBN1号と呼んできた。しかし、これを西暦の下2桁と人骨番号を組み合わせ吉胡5101号と呼び、田原市教育委員会が2004年（平成16年）に発掘した人骨を西暦の下2桁の04に土坑（SZ）番号01を付して吉胡0401号と呼んで簡略化と統一化をはかる。同様に、伊川津貝塚の1984年の調査で発掘した1号人骨を伊川津8401号と呼ぶ。なお、清野謙次が吉胡貝塚で1922年に発掘した1号～236号人骨は2201号～22236号、1923年に発掘した237号～304号人骨は23237号～23304号が正式名であるが、100号以後は5桁で煩雑になるので、本稿では例外措置でこれまで通り吉胡1号～304号と記す。

(7)——吉胡293号の男性頭骨は清野謙次が発掘後まもなくウィーン大学博物館に寄贈、抜歯型式の4I型は同館で実物を観察した橋本裕子氏から2009年5月31日に教示を得た。

(8)——本刈谷0305号人骨は2003年に刈谷市教育委員会が発掘した資料で、同教委の鶴飼堅証氏の厚意によって、2009年6月25日に名古屋大学の新美倫子氏の研究室で調査することができた。

(9)——関東地方晩期中葉の安行3c・3d式の土版に施してあるI字形文も候補にあげたほうがよいとの教示を

2012年5月1日に設楽博己氏から得た。

(10)——吉胡108号の無抜歯は[舟橋2010:365]による。

(11)——叉状研歯をもつ大阪府国府1909号人骨について、私はこれまで女性として扱ってきた。しかし、池田次郎は、「頭蓋骨の眉間や眼窩の上の隆起は女性としては強く、どちらかといえば男性的で、あえて推定すれば、女性的な特徴をもった男性骨ではないか」と述べている[池田1997:105～106]。その一方、1919年に発掘後まもなく頭蓋部と口蓋部に分けて復元していた頭骨を、1995年に接合を最初からやり直し完全に復元した諏訪元は「性別については前頭部や後頭部などが華奢で、四肢骨も小さく華奢なため、女性を思わせるが、いくつかの計測値をみると、津雲貝塚縄文人の男女平均値の中間に位置し、慎重な判断が望まれる。四肢骨関節部などの計測値は小さく津雲貝塚の女性の平均に近い」と記し[諏訪1995:210]、女性の可能性を支持しているようにとれる。

(12)——観音寺本馬0901号の時期は本村充保氏の教示による。

(13)——小論では、2C系を他集団に婚出したあと死後に出身集団に帰葬した可能性を考えた。帰葬の習俗はその後、衰退したとみるのか、それとも死後ただちに出身集団の墓地に運んで埋葬するように変わったとみるのか、明らかでない。しかし、4I系・2C系の存在は弥生前期までであるので、帰葬の習俗もこの時期までとみることもできるだろう。

(14)——水嶋崇一郎らの研究によると、保美貝塚の集積葬のなかの男性の大腿骨の柱状性は同貝塚の単独葬の人骨群とくらべると有意な差があり、さらに吉胡人骨と比較しても顕著であったという[水嶋ほか2004]。集積葬の人骨のうち、抜歯型式がわかる2例は2C型であった。大腿骨の柱状性は狩猟採集の生活型式によって生じるとすれば、保美貝塚の集積葬の対象になった人たちは、山間部で生業活動をおこなっていたことになる。彼らの遺骨が海岸部に位置する保美貝塚の墓地から出土する理由は、保美貝塚の人たちは元々、山間部に住んでおり、保美に移ってくる時にそれまでの墓地を掘り起こし多数の遺骨を移葬したと解釈すべきであろうか。

(15)——2009年8月27日に永井宏幸氏から教示を得た。

(16)——吉胡貝塚は田原湾に面する「眺め潤い、日当りの好い貝塚である」、「貝塚は比較的低位で、山麓の緩勾配の畑が将に水田に尽きんとする所にある。往昔に於ては、波打際に近い砂浜の沙上」であって、「山光水色おだやかな天地だ。日本の貝塚に於て稀に見る好い景色で

ある」と清野謙次は吉胡貝塚の景観に最大級の賛辞をおくっている[清野1925:125]。吉胡が東三河の縄文社会の中心的な位置を占めていた理由、というよりも吉胡に中心をおいた理由は、集落のある緩斜面に屹立する矢崎岩の存在にあったのではないかと筆者は考える。矢崎岩は、ランドマークとなる岩であるが、それ以上にこの岩はこの地点に集落を営む契機となり、以後は長野県茅野市尖石遺跡の「とがり石さま」と同じように、神霊の宿る岩として崇拝の対象になり、集団統合のシンボルの意味をもち、天然の舞台なり祭壇として活用していたのではないだろうか。本稿で問題にしている集落と墓地の形態との関係では、特に東大群の配列に矢崎岩の存在がかかわっていた可能性は大きいと思う。

(17)——嘉永4年(1851年)に春成兼峰が記した文書『家譜略系 春成氏』。

(18)——毛利俊雄・奥千奈美の研究では、頭蓋非計測的特徴によると、どの貝塚でも4I型抜歯を施した者同士の累積類似度は2C型抜歯を施した者同士の累積類似度より高く、4I型はその土地の出身者、2C型は他集団からの婚入者であるとする仮説に適合していること結論している[毛利・奥1998]。また、松村博文の吉胡貝塚や伊川津貝塚など出土の人骨の歯冠計測値の分析では、この地方の人骨群に錯綜した血縁関係が認められるという結果がでている[松村2000]。

(19)——稲荷山貝塚から出土した人骨の炭素・窒素同位体比を調査した日下宗一郎らによると、抜歯系列の4I系と2C系とでは食性が明らかに異なるという[Kusaka *et al.* 2008]。すなわち、4I系の男性7例は陸獣、4I系の女性9例は陸獣を主にして一部の人は海産魚類、2C系の男性8例は海産魚類、2C系の女性(1例)は陸獣に食性が偏っている。そして、4I系の男性1例と女性1例は以上から大きく外れた場所に位置している。ところが、吉胡貝塚では4I系、2C系の男女が陸獣から海産魚類の範囲に広がっている状態で、稲荷山貝塚のような傾向は認められなかった。人骨の炭素・窒素同位体比は、死亡する10年前以降の食性を反映しているという。

稲荷山集落の構成員が、抜歯系列のちがいによって食べ物をまったく異にしていた、と今の段階で判断することはできない。では、4I系の人たちは稲荷山に住み豊川中・上流域の陸獣の肉を摂取していた人たちであったのに対して、2C系の人たちの大多数は、より海岸部に位置する他集団に属していた人たちであって、彼らは死後に稲荷山に帰葬されたために、4I系と2C系との間にこれだけの差が生じていると解釈すべきであろうか。ち

なみに稲荷山遺跡に近いところで規模の大きな集団がのこした遺跡は豊川市麻生田大橋遺跡と田原市吉胡貝塚である。しかし、稲荷山人骨の埋葬姿勢は屈葬21例、伸葬9例であったから、縄文晩期中頃から晩期末までの時間幅をもっている可能性が大きい。食性のちがいは時期のちがいを反映していないか、人骨の年代測定の結果とあわせて検討したほうがよいだろう。

吉胡貝塚のばあい、陸獣を主としていた人と海産魚を主としていた人に分け、どちらかのグループの人たちのうち、2C系の遺体は帰葬であったと推定できるだろうか。吉胡貝塚からは陸獣の骨も海産魚の骨も豊富に出土しており、吉胡集団の生業は後背丘陵でのシカ・イノシシの狩猟と三河湾内でのクロダイ・雑魚などの漁撈、海浜でのハマグリなどの貝類の採取、そして植物質食料の採集であったと推定されている [樋泉 2008]。

(20)——縄文晩期の4I・2C系抜歯の広がりと普及の度合いは、西日本では資料が少なく厳密には不明である。九州・四国・中国地方での4I系抜歯人骨の出土例は以下のとおりである。縄文晩期は九州では1例のみ、四国は皆無、中国では岡山から確実となる。九州では弥生早期～前期の例が見つかったので、それをそれぞれの地域における縄文晩期の遺制とみて、縄文晩期の九州まで4I・2C系抜歯が普及していたと解釈しているわけである。なお、縄文晩期の腰飾りは岡山県津雲貝塚、中津

貝塚が現状では分布の西限である。これも、より西からは縄文晩期の人骨はごく少数しか見つかっていないことと関わりをもっている可能性は十分にある。

(縄文晩期)

鹿児島県南さつま市上焼田 1体(男)

岡山県笠岡市津雲貝塚 33体(男9, 女24)

岡山県倉敷市中津貝塚 1体(女)

岡山県倉敷市涼松貝塚 2体(女1, 不明1)

(弥生早期)

福岡県糸島市新町 2体(女), 支石墓

福岡県福岡市雀居 1体(女), 土坑墓

(弥生早期～中期)

佐賀県唐津市大友 4体(男1, 女3), 支石墓

(弥生中期)

福岡県福岡市藤崎 1体(女), 中期初めの甕棺墓

長崎県平戸市根獅子 4体(男1, 女3), 前期末～中期初めの箱式石棺墓

(21)——豊川流域の縄文晩期の定着度の高い遺跡については、2012年5月31日に岩瀬彰利氏から教示をうけた。

(22)——三品彰英は早く、ウイネバゴ族の双分組織に関心をもち、半族をそれぞれ「天ツ族」「国ツ族」と意識している [三品 1971: 129]。

(23)——インドネシアのバリ島では20世紀まで抜歯の習俗をのこしていた。トゥングナン村の一つの墓地を調

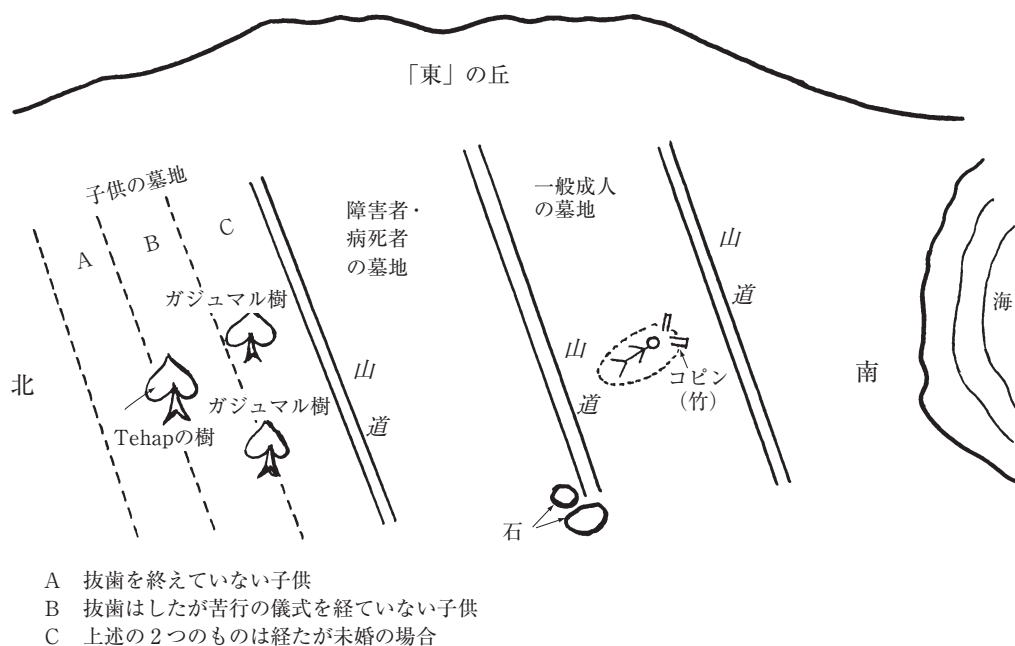


図22 インドネシア・バリ島トゥングナン村の墓地構成 [大重1972]

査した大重幸二は次のように報告している（図22）[大重1972：230～232]。墓地は、海の反対にあたる山側、つまり北を上手にして細い道によって三つの区域に分かれ、上手から子供の墓地、障害者や流行病で死んだ者、過去にそういう状態にあった者の墓地、大人つまり既婚者の墓地の順になっているが、男女の区別はない。子供の墓地はさらに三つに分かれている。抜歯を終えていない子供が死んだ場合はいちばん北に埋める。抜歯はした

がつぎの通過儀礼（子供たちの苦行の儀式）を経ていない子供が死んだ場合はその南に埋める。その通過儀礼も経ているが結婚していない者が死んだ場合は、さらにその南の墓地に埋める。

この例では、抜歯とつぎの通過儀礼、そして結婚との間に一定の期間をおいており、通過した儀礼の段階によって墓地のなかで埋葬する場所を厳格に決めていることになる。

参考文献

- 伊川津貝塚編集委員会（編）1972『伊川津貝塚』渥美町教育委員会。
- 池田次郎 1997「国府遺跡の人骨」『国府遺跡の謎を解く』藤井寺の遺跡ガイドブック、No.8、83～107頁、藤井寺市教育委員会。
- 岩瀬彰利・藤根久・樋泉岳二 2002『豊橋の環境史と貝塚 豊橋平野の古環境復元と遺跡出土の動物遺体』豊橋市教育委員会。
- 大倉辰雄 1939「三河国稲荷山貝塚人ノ抜歯及ビ歯牙変形ノ風習ニ就テ」『京都医学雑誌』第36巻第8号、106～114頁。
- 大重幸二 1971「バリ島の古村における方位観念について」『季刊人類学』第2巻第2号、215～236頁。
- 大塚達朗（編）2011『保美貝塚の研究』南山大学人類学博物館。
- 大林太良 1971「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』第2巻第2号、3～81頁。
- 大山 柏 1923「愛知県渥美郡福江町保美平城貝塚発掘概報」『人類学雑誌』第38巻第1号、1～25頁。
- 長田友也 2011「縄文時代晩期社会論—伊勢湾・三河湾地域を中心に—」『論集 縄文／弥生移行期の社会論』伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・前期篇、21～70頁、ブイツーソリューション。
- 小野田勝一・春成秀爾・西本豊弘（編）1988『伊川津遺跡』渥美町埋蔵文化財調査報告書、第4集、渥美町教育委員会。
- 笠原政治 1987「双分制」（石川栄吉ほか編）『文化人類学事典』433～434頁、弘文堂。
- 金関 恕 1969「弥生の社会」（国分直一・岡本太郎編）『大地と呪術』日本文化の歴史1、原始時代、203～209頁、学習研究社。
- 河合香史 1994「チャムスの民俗生殖理論と性」（高畑由起夫編）『性的人类学—サルとヒトの接点を求めて』160～203頁、世界思想社。
- 河合 潔 1972「伊川津貝塚調査史」（伊川津貝塚編集委員会編）『伊川津貝塚』88～97頁、渥美町教育委員会。
- 川添和暁 2007「鹿角製装身具類について」『研究紀要』第8号、1～22頁、愛知県埋蔵文化財センター。
- 2011a「骨角器・貝製品の様相」（大塚達朗編）『保美貝塚の研究』71～97頁、南山大学人類学博物館。
- 2011b『先史社会考古学』六一書房。
- 清野謙次 1925『日本原人の研究』岡書院。
- 1949『古代人骨の研究に基づく日本人種論』岩波書店。
- 1969『日本貝塚の研究』岩波書店。
- 清野謙次・金高勘次 1929「三河国吉胡貝塚人の抜歯及び歯牙変形の風習に就て」『史前学雑誌』第1巻第3号、43～68頁。
- Kusaka S., Ikarashi T., Hyodo F., Yumoto T. and Katayama K. 2008 Variability in stable isotope ratios in two Late - Final Jomon communities in the Tokai coastal region and its relationship with sex and ritual tooth ablation. *Anthropological Science*, Vol.116, No.2, pp.171-181.
- Kusaka S., Ando A., Nakano T., Yumoto T., Ishimaru E., Yoneda M., Hyodo M. and Katayama K. 2009 A strontium isotope analysis on the relationship between ritual tooth ablation and migration among the Jomon people in Japan. *Journal of Archaeological Science*, Vol.36, Issue 10, pp.2289-2297.
- 甲元眞之 1975「弥生時代の社会」（金関恕・佐原真編）『稲作の始まり』古代史発掘4、87～98頁、講談社。
- 1986「中国先史時代の社会—青蓮崗文化の墓地の分析—」（竹村卓二編）『日本民俗社会の形成と発展』415～428頁、山川出版社。

-
- 小金井良精 1923「日本石器時代人の埋葬状態」『人類学雑誌』第38巻第1号, 25～48頁, 第6図版。
——— 1928『人類学研究』大岡山書店。
- 小林達雄 1993「縄文集団における二者の対立と合一性」(坪井清足さんの古稀を祝う会編)『論苑考古学』121～144頁, 天山舎。
- 小林行雄 1967『女王国の出現』国民の歴史1, 文英堂。
- 小山修三(司会) 1986「討論—「採取社会から農耕社会へ」をめぐる—」(竹村卓二編)『日本民俗社会の形成と発展』429～438頁, 山川出版社。
- 斎藤 忠(編) 1952『吉胡貝塚』埋蔵文化財発掘調査報告, 第1, 吉川弘文館。
- 佐々木高明 1991『日本史誕生』日本の歴史1, 集英社。
- 設楽博己 2009「縄文・弥生時代の祖先祭祀と親族組織」『考古学研究』第56巻第2号, 28～43頁。
- 設楽博己・小林青樹 2007「板付I式土器成立における亀ヶ岡系土器の関与」『新弥生時代の始まり』第2巻, 縄文時代から弥生時代へ, 66～107頁, 雄山閣。
- 杉原荘介・戸沢充則 1971「貝塚文化—縄文時代」『市川市史』第1巻, 原始・古代, 145～302頁, 吉川弘文館。
- 杉山壽榮男 1927『原始工芸』工芸美術研究会。
- 鈴木一議 2010「観音寺本馬遺跡」(文化庁編)『発掘された日本列島2010 新発見考古速報』17～19頁, 朝日新聞出版。
- 鈴木 尚 1940「又状研歯の新資料とその埋葬状態について」『人類学雑誌』第55巻第11号, 489～496頁, 第2図版。
- 諏訪 元 1995「又状研歯のある縄文時代頭蓋骨」(大場秀章・西野嘉章編)『東京大学コレクション(Ⅱ) 一動く大地とその生物—』48頁, 209～213頁, 東京大学総合研究資料館。
- 高木祐志・坂口 隆 2010『保美貝塚発掘調査概要報告書』有限会社丸金横江仏具。
- 竹村卓二(編) 1986『日本民俗社会の形成と発展—イエ・ムラ・ウジの源流を探る—』山川出版社。
- 田中良之 1998「出自表示論批判」『日本考古学』第5号, 1～18頁。
——— 2004「出自」(安斎正人編)『現代考古学事典』221～225頁, 同成社。
——— 2008『骨が語る古代の家族』歴史文化ライブラリー 252, 吉川弘文館。
- 田中良之・土肥直美 1988「出土人骨の親族関係の推定」(小野田勝一ほか編)『伊川津遺跡』渥美町埋蔵文化財調査報告書, 第4集, 421～425頁, 渥美町教育委員会。
- 谷口康浩 2005『環状集落と縄文社会構造』学生社。
- 樋泉岳二 2008「動物遺体(貝・骨)」『日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集』69～76頁, 日本考古学協会2008年度愛知大会実行委員会。
- 中山英司 1952「人骨」(斎藤忠編)『吉胡貝塚』埋蔵文化財発掘調査報告, 第1, 125～144頁, 吉川弘文館。
- 布村一夫 1973『日本神話学・神がみの結婚』教育文庫4, 麦書房。
- 橋本裕子・馬場悠男 1998「歯の非計測的特徴に基づく古人骨埋葬小群の確認」『日本考古学協会第64回総会研究発表要旨』58～60頁。
- 春成秀爾 1973「抜歯の意義(1)」『考古学研究』第20巻第2号, 25～48頁 [春成2002]。
——— 1979「縄文晩期の婚後居住規定」『岡山大学法文学部学術紀要』第40号(史学篇), 25～63頁 [春成2002]。
——— 1980「縄文合葬論」『信濃』第32巻第4号, 1～35頁 [春成2002]。
——— 1982「土井ヶ浜集団の構造」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』上巻, 355～376頁, 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会。
——— 1984a「採取社会から農耕社会へ—日本—」『社会組織—イエ・ムラ・ウジ—』国立民族学博物館特別研究, 日本民族文化の源流の比較研究シンポジウムV, プログラム・抄録, 113～127頁, 国立民族学博物館。
——— 1984b「縄文社会論」(加藤晋平ほか編)『縄文文化の研究』8, 社会・文化, 223～252頁, 雄山閣出版 [春成2002]。
——— 1985「鉤と霊—有鉤短剣の研究—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第6集, 1～62頁 [春成2002]。
——— 1986「縄文・弥生時代の婚姻居住様式」(竹村卓二編)『日本民俗社会の形成と発展』391～414頁, 山川出版社。
——— 1988「埋葬の諸問題」(小野田勝一ほか編)『伊川津遺跡』395～420頁 [春成2002]。
——— 1990「又状研歯」『国立歴史民俗博物館研究報告』第21集, 87～137頁 [春成2002]。
——— 1995「葬制と社会組織」『展望考古学』84～93頁, 考古学研究会 [春成2002]。
——— 2002『縄文社会論究』塙書房。
-

- 2004「抜歯」（千葉県史料研究財団編）『千葉県史』資料編，考古4（遺跡・遺構・遺物）488～505頁。
- 2010「猿の橈骨製耳飾り」『渥美半島の考古学—小野田勝一先生追悼論文集—』179～186頁，田原市教育委員会。
- 舟橋京子 2003「縄文時代の抜歯施行年齢と儀礼的意味」『考古学研究』第50巻第1号，56～76頁。
- 2009「古人骨資料から見た縄文時代の社会集団」『考古学研究』第56巻第2号，12～27頁。
- 2010『抜歯風習と社会集団』すいれん舎。
- 増子康真 2008「晩期半截竹管文土器」（小林達雄編）『総覧 縄文土器』774～781頁，アム・プロモーション。
- 増山禎之・坂野俊哉（編）2007『国指定史跡吉胡貝塚（Ⅰ）』田原市埋蔵文化財調査報告，第1集，田原市教育委員会。
- 松村博文 2000「瀬戸内，東海および関東地方出土の縄文人の歯冠計測値における時期間，遺跡間および個体間変異」『国立科学博物館専報』第32集，39～51頁。
- 三品彰英 1971「天ツ神族・国ツ神族と双分組織」『神話と文化史』三品彰英論文集，第3巻，115～173頁，平凡社。
- 水嶋崇一郎・坂上和弘・諏訪元 2004「保美貝塚（縄文時代晩期）の盤状集積人骨」*Anthropological Science*, Vol.112, No.2, pp.113-125.
- 宮坂光次 1925「三河国保美貝塚に於ける人骨埋葬の状態」『人類学雑誌』第40巻第10号，364～372頁。
- 宮本博人 1925「津雲貝塚人の抜歯風習に就て」『人類学雑誌』第40巻第5号，167～181頁。
- 眞岡亀四郎 1940「日本石器時代人ノ人為的歯牙変形ニ就テ」『京都医学雑誌』第37巻第3号，166～168頁，付図。
- 最上孝敬 1953「男女別墓制ならびに半檀家のこと」『日本民俗学』第1巻第2号，85～89頁。
- モーガン，L. H.（古代社会研究会訳）1990『アメリカ先住民のすまい』岩波文庫，白204-3，岩波書店。（原著はL. H. Morgan 1881 *Houses and House-Life of the American Aborigines.*）
- モルガン，L. H.（青山道夫訳）『古代社会』上・下，岩波文庫5973-5976，岩波書店。（原著はL. H. Morgan 1877 *Ancient Society or Researches in the Lines of Human Progress from Savagery through Barbarism to Civilization.* Holt.）
- 毛利俊雄・奥千奈美 1998「西日本縄文晩期抜歯型式の意味—頭蓋非計測特徴による春成仮説の検討—」『考古学研究』第45巻第1号，91～101頁。
- 本村充保 2009「観音寺本馬遺跡—京奈和自動車道（観音寺Ⅰ区）—」『奈良県遺跡調査概報』第3分冊，2008年，245～270頁，奈良県立橿原考古学研究所。
- 山田康弘 1995「多人数合葬例の意義」『考古学研究』第42巻第2号，52～67頁 [山田2008a]。
- 2008a『人骨出土例にみる縄文の墓制と社会』同成社。
- 2008b「葬制と地域社会」『中四国における縄文時代後期の地域社会の展開』第19回中四国縄文研究会発表資料集，147～160頁，中四国縄文研究会。
- 2008c「貝塚遺跡における墓制」『日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集』117～163頁，日本考古学協会2008年度愛知大会実行委員会。
- 山内清男 1952「第二トレンチ」（斎藤忠編）『吉胡貝塚埋蔵文化財発掘調査報告，第1，93～124頁，吉川弘文館。
- Radin, P. 1923 *The Winnebago Tribe*. The Thirty-Seventh Annual Report of the U.S. Bureau of Ethnology to the Secretary of the Smithsonian Institution, 1915-16. (1970 Johnson Reprint Corporation)
- レヴィ＝ストロース，クロード（生松敬三訳）1972「中部および東部ブラジルにおける社会構造」「双分組織は実在するか」（荒川幾男ほか訳）『構造人類学』135～179頁，みすず書房。
- 2001（川田順造訳）『悲しき熱帯』Ⅰ・Ⅱ，中公クラシックスW3・W5，中央公論新社。
- 渡邊欣雄 1987「氏族」「胞族」「リネージ」（石川栄吉ほか編）『文化人類学事典』330～331頁，698～699頁，819～820頁，弘文堂。

（国立歴史民俗博物館名誉教授）

（2012年1月12日受付，2012年5月25日審査終了）

Clan System and Dual Organization of the Final Jomon Period in Mikawa Region, Central Japan

HARUNARI Hideji

During the Final Jomon period and the Early Yayoi period, distinctive customs spread through the Mikawa region, including two different patterns of tooth ablation (type 4I and type 2C), waist ornaments worn by some males, tooth-filing in some males and females, and re-burial tombs in which the bones of multiple individuals were collected. Among those buried in the tombs at the Yoshigo and Ikawazu sites, which are representative of eastern Mikawa, an area consisting of Atsumi Peninsula and the Toyokawa River Basin, many of the remains with type L waist ornaments had a type 4I tooth ablation pattern, and many of the remains with type Y and V waist ornaments had a type 2C tooth ablation pattern. At both sites, the tooth ablation pattern of most remains with filed teeth was type 4I. The relationship between the type J waist ornament, found with many of the remains at the Hobi site, and the tooth ablation type remains unclear. Multiple burials are observed within groups of type 4I individuals and type 2C individuals, but not between groups of type 4I individuals and type 2C individuals. At the Yoshigo, Ikawazu and Hobi sites, multiple burials are prominent among type 2C individuals, and in some cases type 2C individuals buried together possibly had an interfamilial relationship.

From all of these evidences, the following can be deduced. Type 4I is a group including clan L (tentative name), type 2C is a group including clan Y and clan V (tentative names), and the type L, Y, V and J waist ornaments were regalia worn by the respective heads of each clan. There is a rank distinction between the type 4I and type 2C groups, and it is assumed that clan L, from which many individuals with waist ornaments have been found, ranked highest among the Yoshigo group, and among various clans in eastern Mikawa. In other words, eastern Mikawa was a tribal society consisting of two groups and four or more clans in which the Yoshigo group, and particularly clan L, played the central role for tribal unity. The ratio of type 4I groups and type 2C groups is almost 1:1; however, although the proportion of males and females within each group is almost 1:1 at the Yoshigo and Ikawazu sites, there were more females among the type 4I group and more males among the type 2C group at the Hobi site. If this is considered to be result of some sort of restriction on belonging to these two groups, the existence of a dual organization in eastern Mikawa can be proposed, with each group being regarded as a moiety.

Keywords: waist ornaments, tooth filing, clan, final Jomon period, dual organization, tooth ablation type, Yoshigo, Ikawazu, Hobi, Mikawa
